

転生者多スギィ！

ハイ！ゼエン！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インフィニットストラトスの世界に転生したけど転生者多すぎイ！ハーレム作ろうとかそんなこと（考えている暇）ないです。一夏からヒロインをNTRとか何人くらいいるんですかね。

あつ、おい待てい（江戸ツ子）のほほんさんは俺の嫁だゾ。他の転生者にNTRないように頑張らないと（使命感）

本編

1話

2話

3話

4話

5話

6話

目次

1

18

34

53

64

76

本編

1話

この世界には二種類の人間がいる。

1つは元々この世界に住んでいた人間達。

もう一つは1度死んで別の世界からやってきた転生者達。

どちらも見た目は変わらないが決定的な違いは転生者は「特典」を持つているということだ。

特典を持つ転生者は常人を超越し、世界を変える特典すらある。

さて、ここで自己紹介させてもらう。俺、レーン・エイムは転生者の部類に入るらしい。しかし特典と言われるものを持っていないのだ。

本来ならば、神様が「間違えて君の事を殺しちゃった♡お詫びに特典つけて好きな世界に転生させてあげる♡」となるらしいが俺はそんな事を聞いた覚えもない。

隣の席の金髪イケメン君はそう言われて特典を貰ったそうだ。ちなみに彼の特典は『乖離剣―エヌマ・エリシユ』という剣だそうだ。

なかなか格好いい剣だけど殺意が高すぎないか？ここはただの小学校で俺達はただの小学生だぜ？まあクラスの中に金髪or銀髪でイケメンの小学生が10人近くいるのはおかしいと思うけど。

「銀髪とか奇抜な髪で顔がイケメンの野郎はだいたい転生者だ。どいつもこいつも顔がイケメンならモテると思ってるんだろうよ」

と隣の金髪君（後で聞いたがギルガメッシュというらしい）は俺に教えてくれた。金髪君、君もだいたい奇抜な髪をしているよ。

しかし改めて見るとなかなか凄いい光景だ。クラスの3分の1が銀髪&金髪の子が揃いというまるでアニメの世界のようだ。もっともそのイケメンが全員小学生というのだから何とも格好のつかない話だ。

女子に関しては普通な子が多い、ただ1人を除けばだが。金髪君とは反対の隣にいる女子は髪が深緑色で片目にオサレな眼帯をつけているので目立っていた。まるで転生者みたいな奇抜さだったので気になって聞いてみたがやはりそうみたいだった。

眼帯をつけた女の子（キンケドウというらしい）は俺達と同じ転生者だが特典を貰った覚えもなくその上気づいたら女の体になっていたそうだ。

環境や体の変化に随分と苦労しているそうなので同じ転生者として助けて上げることにした。と言っても小学生なので出来ることは限られるだろうけども、少しでも助けになればいいな。

☆

ある日、俺のクラスの中でいじめがあった。

いじめられていたのは篠ノ之箒という女の子で転生者ではなくただの女の子らしい。金髪君から教えて貰ったが何故彼は簡単に見分けられるのだろうか？

それは一旦置いといて、篠ノ之は見えた目がボーイッシュなことから馬鹿にされて男子と喧嘩になることがあった。それが原因で恨みを買っついじめになったらしい。

この時、クラス中のイケメン達（転生者）が我先にといじめを止めようとしたのだ。

なんて格好いいのだろう。女子の為に立ち上がり虐めを止めようとする其の姿は正義の味方のようなだった。俺も同じ転生者として見習わなくてはならないとな。

それ以降クラスの中でわだかまりは無くなり、何か問題があるならイケメン達が駆けつけるなんて伝説すら出来た。

ちなみに篠ノ之を助けたイケメン達の中に織斑という転生者ではない男子もいたようだ。きっと彼はアニメの主人公のような勇氣ある人間なんだと尊敬した。

☆

篠ノ之のいじめから長い時間がたち、俺達は4年生に上がった。クラス替えでイケメン達はバラバラに別れたが金髪君と眼帯の女の子は相変わらず同じクラスだった。

今年もこの2人と楽しく過ごせたらいいな、なんて考えはとうやうら甘かったみたいだった。

「白騎士事件」

世界中のミサイルが何者かによつてハッキングされて、日本に向けて発射された。おおよそ2000発のミサイルを全て撃ち落とす技術は自衛隊にはなかった。

誰もが諦めていたその時である。

いきなりISと呼ばれる兵器が現れたのだ。現れたISは片腕に持つレーザーライフルによつて半分のミサイルを薙ぎ払い、片腕に持つ刀で残りのミサイルを切り裂き、全てのミサイルはISによつてたき落とされた。

その後、世界中がISを捕まえようと軍隊を派遣するも艦隊は武装を斬られ、戦闘機は無力化された。しかし死者は0人であった。

現代兵器をはるかに凌駕する力があり、誰も死なすことのないほど余裕がある。

これを作った篠ノ之束はISの元となるISコアを世界中に配布させられた。

この事件によつて世界は大きく動いた。

ISという兵器、そしてそのISは女性にしか使うことが出来ないということ。

そんなことよりもクラスの方が大きく動いている気がする。そう、ISを開発した篠ノ之束が注目されているせいで妹の篠ノ之箒を守る為に転校が決まった。それによつてクラスのイケメン達が大慌てしているのである。

どうにも「まだフラグ建ててねえよ!」とか「あれ?ワイに惚れるどころか誰にも惚れてなくね?」とかとか意味はわからないが篠ノ之

が居なくなることには慌てている。

金髪君の反応を伺うと

「あれほどの事件があったんだ。その関係者である筈は必ず危険になる。寧ろ転校して身の安全を確保することが優先だ」

と言っていた。

おお、冷静に考えているようだ。やはり他の転生者とは何処か雰囲気が違う。

眼帯の女の子の方はというと

「友達が遠くへ行くのは寂しいな」

と言っていた。仕方ないとはいえ、友達と別れるのは辛い。いつか再開出来るといいけど。

さて、俺はというと実は全く関わりがない。いじめの一件で仲良くなった人は多いが、それを知ったのも全てが終わったあとで今更輪の中に入る勇気もなく、金髪君と眼帯の女の子と過ごしていたので特に思う事はないのだ。強いていうなら体に気を付けてくらいだろう。

そんなこんなでクラスでお分かれ会が開くことになっていた。イケメン達がみんな「また会おうぜ!」とか言っていたので便乗しておいた。金髪君が「どうせまた会えるさ。だいたい7年後くらいにな」とか具体的な事を言っていた。

☆

ISが誕生したことによってここ数年世界はどんどん変わっていった。現代兵器における戦闘機は廃止が決定、多くの軍人は失職した。

女性にしか使えないことがわかってからは力を持つのは女性だと言っている人が増え、女性権利団体による横暴が増えていった。

さてそんなことは置いておき、俺は小学生5年生になった。相変わらず金髪君と眼帯の女の子は一緒にいる、そしてイケメン達も。

そして最近クラスに新しく転校生がやってきた。名前は凰 鈴音、中国からやってきたらしく日本語がまだ上手く出来ないそうだ。

相変わらずというか、篠ノ之のいじめの一件で懲りてないやつらが次は嵐をターゲットにしたのだ。

そして今回もイケメン達による成敗が行われ嵐とクラスの仲は縮まった。

それと今回の虐めを止めようとしたイケメン達の中に転生者じゃない男子がいた。織斑もいたが五反田 弾という奴で、1番最初に虐めを止めようとしたらしい。

きつと織斑と同じで自信がある素晴らしい人間なんだろう。

☆

それから少しして俺達は小学校を卒業し、最寄りの中学校に入った。中学に入れば環境が変わると思っただが隣にいるのは相変わらず金髪君と眼帯の女の子、あとはいつものイケメン達のメンバーだった。

環境が変わったと言えば父がリストラされたことだ。

父は自衛隊を勤めていたが、ISの導入と同時に行われた人員整理によって多くの男性職員が解雇された。

父はこの世に絶望して酒に逃げ、母は父を捨て自分だけが助かる道を選んだ。しばらくして父も俺を捨てて何処かに行ってしまった。

どうやら俺も覚悟しなくてはならないようだ。

☆

両親が居なくなり半年が立つ。家に残っていた金は母が居なくなる時に持って行ってしまったのでアルバイトをしてなんとかやりくりしてきた。死ぬほど辛い時もあったがたバイト先で偶然一緒だった織斑に励まされて頑張ろうと思えた。

しかし今はもうバイトを辞めて代わりにISを作る会社で働いている。何故男の俺がISの会社にいるのかというと、その会社の社長が転生者で「ちようどテストパイロットが欲しかったんだよ」という

理由で雇われた。けど男の俺にはIS適正がないはずでは?と思っ
ていたら「転生者には等しくIS適正があるのさ。特典に関係なく、
ね」と丁寧に教えてくれた。

それとだが俺だけではなく金髪君や眼帯の女の子もこの会社に雇
われることも教えてくれた。知り合いがいるのはありがたいが、これ
からもあの2人には長い付き合いになりそうだなと思った。

それから三ヶ月ほど経ち、俺達3人は専用のISが渡されパイロッ
トとしての仕事が始まった。いやパイロットとしての仕事は既に
あったのだが練習機体でISについての研修なので仕事というべき
なのかわからないのだ。まあどちらでも問題はないのだけれども。

金髪君のISは王の財宝ゲイトオブバビロンというISで、装着すると上半身が裸に
なる。

眼帯の女の子のISはクロスボーンガンダムX1という髑髏がつ
いてあるせいで海賊みたいだ。ちなみに装着するとヘソが見える。

…金髪君の機体と取替えてみませんか? (小声)

あ、ダメですか。

そして俺のISだがペーネロペーというISなのだが、全身を装甲
で覆い尽くされた上にさらにその上から鎧のような装甲を被るので
デブその物だ。

ちなみに俺のISだけ肌を出すことがなかった。金髪君が涙を流
した。

さっそくテスト飛行することになったのだが金髪君のISでは飛
ぶことが出来ないらしく仕方なく俺のISの背中に乗せて飛ぶこと
になった。

既に知識としては理解していても実際にやるのはなかなか難し
いものだ。眼帯の女の子はもう自由に飛び回っているが俺はトラク
ターくらいの速さでウロウロしている。金髪君が背中に乗ってるか
ら本気だしてないだけです (震え声)

それから射撃練習や着地練習をしたがやはり上手くいかず、俺だけ
が補習を受けることになった。いや、眼帯の女の子や金髪君がうます
ぎるだけで俺は普通なんだよ!

☆

ISに乗るようになってから半年が経ち、中学2度目の夏休みに入っていた。

俺達は夏休みを満喫ではなく、ひたすらISに乗っては訓練の日々だった。一応お盆休みを貰おうと思ったが、両親が居なく親戚の存在を知らない俺にはそんなものを貰えるわけがなかった。

代わりにだがドイツで行われるISの世界大会の見学に行くことになった。俺達はどんなにやってもアマチュアレベルなので、プロの動きを見て学べと社長直々に指示された。

しかしドイツに行けるのは普通に嬉しい。海外の文化は気になっているし、日本では体験出来ないことを感じてみたい。早く行きたいところだ。

ソワソワしていると金髪君から

「どうせ碌でもない事が起こる。お前も気を付けておくんだな」

と言われた。まあ海外だから文化の違いで勘違いとか起きそうだけど。

☆

初のドイツということ結構緊張していたが、見てみたらガツクリしてしまった。ドイツの光景なんてとんでもない、ほとんど日本風に変えられているのだ。IS用のアリーナが作られると同時に周りの建物も改築され、日本風の物になっていたのだ。

通訳の人に聞いたところ『そういうのが見たいならもつと田舎の方に行かないとね。ここら辺はみくんな変わっちゃったからね』だそう。何とも残念だ。

仕方ないが切り替えてISの試合をしつかりと見る。技術の一つや2つを見て出来るようになったらいいのだが。

ちなみに俺達は社長の紹介によって特別席で眺めていたのだが、何

故か織斑がいた。何故いるのかと聞いてみると

「千冬ねえが参加しているんだ。せつかくだから見てみたくてここまで来たんだ」

という答えが返ってきた。千冬ねえというのは織斑の姉で、日本代表選手としてこの大会に参加している。

織斑と世間話をしていると試合が始まっていた。さつそく織斑の姉が出ているがとんでも無く早く強い。動きが他の選手とまるで違い、鳥のように自由に動き回っていた。

戦闘スタイルは眼帯の女の子も織斑の姉と同じで機動力で圧倒してから攻撃をするスピード型だ。

ちなみに俺のISはある程度の攻撃を装甲が防ぎ、シールドエネルギーを攻撃に回す防御に優れたデیفエンス型。金髪君は機動力も防御も全て捨ててエネルギーの全てを武装に回しているアタック型だ。

閑話休題、織斑の姉は当然のように勝利し次の試合が始まった。やはり世界大会だけあってレベルは高いが織斑の姉と比べると1つ落ちてしまう。どれだけ織斑の姉は異常なのか常人には計り知れないな。

試合もどんどん進んで行き準決勝1回戦が始まるまで来た。その前に一旦休憩が挟まれたのでトイレに行っておこう。織斑や金髪君を誘うと場所を確認したいということで眼帯の女の子も一緒について来ることになった。

かなり大きなアリーナなのでトイレが何処にあるかわかりづらいので近くに立っていた黒服のガードマンに聞いてみると案内してくれた。

案内されるがままついて行くと倉庫のような部屋に着いた。どう見たってトイレじゃないのに何を考えているんだと聞こうとしたら、腹を思い切り殴られ昼に食べた物が全て吐き出される。俺の後ろにいた織斑や金髪君も何処からか出てきた黒服達に捕まっていた。碌でもない事ってこういう事かよ…

☆

頭に水をかけられて目を覚ます。目の前にはさっきの黒服達がこちらを見下していて、隣には縄をかけられた金髪君と眼帯の女の子がいた。どうやら誘拐されてしまったようだが隣の2人はまるで興味が無いという顔をしていた。

「この程度の奴らに負けるわけがなかろう」と金髪君は言い、「やられた振りをしただけだ。ISを使わない奴らに本気を出しても意味はないだろ」と眼帯の女の子は言う。

この人たち頭おかしんじゃないですかね。今更だけでも。

そういえば織斑がいなかった。金髪君に居場所を聞くと「一夏なら隣部屋にいるだろうな。奴らの目的は『織斑千冬の弟』だけで俺らの存在は邪魔にしかならん」

「なら戦うか。そろそろトイレに行きたいし」と眼帯の女の子は面白いながら立ち上りISを装着し「ちよつとコンビニ行ってくる」といいながら目の前の黒服ごと吹き飛ばして部屋を出ていった。

いつの間にか金髪君も縄を解いていて、帰ろうとしている。俺はというと相変わらず縄を解けないまま床に寝ていた。

へるぷみー。

結局あの後心配になった眼帯の女の子が俺を助けに来てくれた。俺が助けられた時にはこの誘拐事件も全て終わっていたみたいだった。

織斑は眼帯の女の子が暴れたおかげで助かり、金髪君が帰り道に逃げようとした黒服達を全て取り押さえたそうだ。俺だけが何もしてなくて凹んでいるがそもそも中学生に期待するほうがおかしいと考えることにした。

織斑の姉は決勝戦を出ないで織斑の元に駆けつけたそうだが、そのせいで決勝戦が相手の不戦勝になり織斑の姉は政府から責任をとらされることになった。なんとも理不尽な話だ。

☆

ドイツから帰国後夏休みが終わるまで俺は訓練に明け暮れていた。誘拐されたあの時、俺だけが何も出来ずにいたが悔しかったからだ。ちなみに訓練をしすぎて宿題を忘れたことを眼帯の女の子に笑われた。

夏休みが終わっても夏の暑さがまだ終わらない頃、凰 鈴音の転校が決まった。そのせいで篠ノ之の時と同じようにクラスのイケメン達が慌てていた。そしてクラスの中でお別れ会をすることになった。「また友達が居なくなるのか…」と悲しげに眼帯の女の子は言っていた。金髪君は「どうせ2年後くらいには会うことになる」と篠ノ之の時と同じように具体的な予想を言っていた。

お別れ会も終わり、クラスのイケメン達はみんな空港までついていき、最後まで見送っていた。眼帯の女の子が最後に凰と抱き合っていたのだが「ああ、くたまらねえぜ」とか「キマシタワー!!」とか聞こえた気がする。

☆

凰が転校してから一年とちよつと経ち、俺達は受験シーズンに入った。と言つても前世ではそこそこの頭が良かったので俺の学力では特に困ることはなかった。

眼帯の女の子はIS学園と呼ばれるISについて本格的に学ぶ為に行きたいらしい。

金髪君は高校には入らず、そのまま今の会社でパイロットをしたいそうだが「嫌でも彼処に連れて行かれるんだ。希望するだけ無駄」と言っていた。

クラスのイケメン達は近くの藍越高校に行くそうだ。ちなみに織斑もそこに入っていた。

☆

「速報！ISが使える男が見つかる!？」

このニュースは全国に広がり、全世界で男性に対してIS適正検査が行われることになった。俺や金髪君は当然だがイケメン達は皆適正を持ち、他からも集まり最終的に30人近く集まった。ちなみに織斑以外はみんな転生者だ。

国連が発表したのはIS学園で保護をするということだ。結局のところ無理矢理IS学園に行かされることになったのだ。まあISを本格的に学ぶなら必須とも言える高校に入ることが出来るのだから感謝しよう。

ちなみに眼帯の女の子は普通に試験に合格したらしい。

☆

ISを使える男が見つかったから二週間、ちょうど今日はIS学園の入学式だ。生徒会長からのありがたい話を聞き流して立ちながら寝た。眼帯の女の子に叩き起された。

入学式も無事に終わりクラスが発表される。俺と眼帯の女の子は同じ1組だったのだが金髪君だけが2組に行ってしまった。今までずっと一緒だっただけに残念だ。

ちなみにイケメン達はほとんど別れ、1組にいるのは1人だけだ。あと、織斑も同じ1組にいた。

少ししてから副担任の山田真耶という女性が来たのだが、ドジっ子と言うべきなのか既に教室で2回も転び焦って何をすればいいのかわからなくなるなど心配になった。

とりあえずお互いを知るために自己紹介をすることになった。自分の順番が回ってきたので名前と出身中学と趣味を言っておいた。

俺の次は織斑なのだが如何せん緊張して上手く話せなさそうなのでカンペを送ってやった。織斑は少しぎこちないがクラスの自己紹介には充分だった。

織斑の番が終わると織斑の姉である織斑千冬がやって来てこの1組を担当することを伝えた。それと同時にチャイムが鳴り、自己紹介

は強制的に終了し「休み時間にやっておけ」と言われた。

改めて1組のメンバーを見てみる。今まで一緒だった織斑や眼帯の女の子、イケメン達の中にいた銀髪君、それと篠ノ之箒がこの1組にいたというのは驚きだった。

「ちよつとよろしいですか?」

後ろを振り返ると金髪の女子が織斑に話しかけていた。織斑の頭の上に?がいくつか浮いて見える。織斑が俺のほうを見てくるが俺も知らないのでどうすればいいかわからない。

「ちゃんと聞いていますか?」

「あ、うん。一応聞いてるよ」

「まあなんですかその返事は!?!」

織斑がもう一度こちらを見てくる。仕方ないので助言を送ることにした。

「すみません!お金なら出すので許してください!」

「…はいいい!?!」

織斑が更にもう一度こちらを見てくる。さらに助言を送る。

「いや、本当にすいませんでしたああ!!」

滑り込むように完璧な土下座を決め込んだ。本当にやると思っ
てなかったのだが、やられた金髪の女子はオロオロしている。

「うわ、織斑君カツアゲされてるよ」

「カツアゲから始まる恋愛の可能性が微粒レベルで存在している…?
?」

「初日からヤンキーに絡まれるなんておりむーも大変だね」

クラスの全員が織斑と金髪の女子のやり取りに注目してる。金髪の女子は更にオロオロし始め慌てていた。

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り、担任が入ってくる。後からきた先生からすると金髪の女子が織斑を土下座させてるように見えた。呆れたのか顔に手をあててため息を吐いた。

「さっさと席に戻れ。織斑とオルコットの2人は後で職員室に來い」

無慈悲な宣言を叩きつけられた金髪の女子(オルコット)は顔面蒼白と言ったところだ。織斑は助かったと安堵していた。

「さつそく授業を始める、と言いたいところだが先に決めることがある。クラスの代表を決めるぞ。自選及び推薦は自由だ」

この後副担任からクラス代表の仕事を説明された。主な活動は庶務として担任の手伝い、それとクラス代表戦と呼ばれる他クラスのクラス代表者とISでの戦いに参戦することだ。

「せっかくだし男子にやつてもらうなんてどうかな?」

「はいはい!あそこの銀髪の彼なんてどう?」

「男子ならエイム君もいるじゃない」

「なら私は織斑君を推薦するよ」

完全にクラス代表者は男子の誰かにしようという流れである。どうか自己紹介がまだ終わってないから銀髪君の名前を誰も知らないじゃないか。俺は知ってるけど。

「ちよつと待ってください!」

「どうしたのオルコットさん?」

「なぜ男などにクラス代表をさせるのですか!?それよりも私の方がよっぽど相応しいというのに」

「クラス代表がヤンキーとかウチらまで危ない目で見られちゃうから...」

女子達は盛り上がっている時、俺と織斑は教科書を見て予習をしていた。織斑は全くわからないということと実際に乗ったことのある俺が色々と教えていた。

「そんなに言うなら決闘ですわ!」

「上等だ!」

「なら一週間後の日曜に織斑とエイム、オルコット、セイエイの4人で試合を行う。その結果でクラス代表を決める。さつそく授業を始めるぞ」

いつの間にか銀髪君はオルコットと喧嘩をしていて、その上決闘するなんてことを言い出した。

「え...?ちよ、ちよつと待ってくれよ千冬ねえ!どうして俺まで!?!」

「織斑先生と呼べ。推薦された以上その責任がお前にはある」

「そんなあ...」

うわあ、どんまい織斑。

「自分には関係ないと思うなよ、エイム貴様も推薦されたのだからな」
うわあ、どんまい俺。

☆

ようやく今日午前中の授業が終了し食堂に向かう。来る途中に何人も転生者を見かけたのだが今までは奇抜な奴が多かった筈なのに周りの普通の女子までもが奇抜なせいで1周回ってあれが普通に見える。

ピンクや緑、水色の髪すら居る。ふつう、ふつうの髪ってなんだよ。食堂につくと生徒で賑わっていた。

俺は何にするか迷っている和金髪君に声をかけられ、一緒に食べないかと提案された。丁度話したかったので良いタイミングだった。

金髪君のクラスではクラス代表者が転生者の奴らがやりたがり、結局ジャンケンで決めることになり、最終的にホワイト・グリントと言う奴が代表になったらしい。

1組もジャンケンで決めてくれたら助かるんだがな。

そういえば1組に篠ノ之がいた事を伝えると「知っている」と返された。ちょうど7年後に再開するという予想をあてられた理由を聴きたかったが最後まで教えてくれなかった。

☆

午後の授業も終了し、放課後になり、男子は教室に集められ、副担任から忘れていた寮の鍵を渡された。大浴場はまだ男子の時間が確保出来ないので入れないということに注意された。そして何故か織斑が副担任からホモ認定されていた。

特にやる事もない俺は適当にぶらついていて。ちょうどこの時間は部活動が始める時間なので体育館に向かってみようと足を進めると銀髪君が突然現れて「何処の誰だか知らないが俺のハーレムの邪魔

だけはするなよ！」と言つてすぐに何処かにいった。

俺は君の同級生なんだよなあ：

体育館につくとハンドボールが行われていた。どうやら新入生向けに練習を見せているみたいだ。

見学している生徒の中に見知った顔があつた。確か相川さんだつただろうか。

せつかくだから声を掛けることにした。

「ひゃあーびつくりした。エイム君がいるなんて驚いたよ。もしかしてハンドボールに興味があるの？」

別にそういう訳ではないが中学の頃にはなかつた部活だから物珍しさに釣られた感じだ。

「へえ。ねえ良かったら一緒にやってみない？」

誘いは嬉しいがまだこの部活しか見ていないのだから他の部活も見てみたい。ということでは今は断ることにした。

「そっか……。私中学の頃はエースだったからもし入る気になったらなんでも聞いてね！」

じゃあスリーサイズを教えて貰おうと思つたが、あまりに純粋な目を見て良心がいたんだのでやめた。

その後もグラウンドでサッカーを見学したがそもそも運動部はどうしても女子との試合しかないため公式戦に出ることはできないことに気づいた。

もちろん例外はあるかもしれないがそこまで希望している部活がある訳では無い。

☆

文化部ならばと思ひ、校舎に戻ることにした。

各部活が宣伝しているポスターを見つけ、文化部を探してみる。華道、茶道、演劇、美術、……とやはり大きな学園だけあつて生徒も多くそれに合わせて部活の数も多い。

その中でも珍しいものを見つける。

「生徒会員募集中！」

生徒会と言われるとやはりあの生徒会長の事が浮かんでくる。あの髪の色はなかなか奇抜だ。ピンク色の髪の女の子といい勝負をしている。

「ふーん、君それに興味があるんだ」

いつの間にも後ろには生徒会長が立っていた。改めて近くで見ると水色の奇抜さが際立つ。

失礼なことを考えすぎていた頭を振り、適当に返答をする。

「偶然かあ。ねえエイム君、私達と一緒に生徒会をやってみない？」

まさか誘われるとは。これは意外だった。

断る理由はないし、やってみてもいいと思った。しかし同時にある考えが浮かんだ。

もしかしたら生徒会に入ったら髪を水色にしなきゃいけない伝統があるのではないか。そうでもなければこんな髪色にするわけがないのだろう。

ということまで自分まで髪を水色にはしたくないのでお断りさせてもらった。そこまで奇抜になるつもりはないのだから。

「奇抜って……これは地毛よ!!それに水色に染めるなんて伝統はないわよ!!!」

……地毛なのか。…地毛なのか。

「2回も言わないでよ!!そこまで言われると泣くわよ!泣いちゃうわよ!」

地毛なんですか？

「ウワアアアン!エイム君がいじめてくるうううう」

ガチ泣きしながら走り去っていった。流石に言い過ぎてしまった気がする。……しかし本当に地毛なのだろうか。

☆

部活動見学を終わりにして寮に戻る。

扉を開けて部屋に入る既に人がいたようだ。挨拶をしようとする

と、いたのは眼帯の女の子だった。とりあえず知り合いが同じ部屋で安心をした。

その後、俺達は夕食を食べてベッドでぐっすり眠った。

2話

体を起こしカーテンを開くとちようど太陽が昇り始めていた。時間は5時ちようどになる、清々しい朝だ。

外を見てみると誰かがジャージを着て走っていた。こんな朝から走り込みとは精が出ているな。よし朝の食堂まで時間はあるし、俺も軽く走ろうか。

☆

ここ、IS学園は海に囲まれる島であり全てが学園の領地だ。ちなみに寮の後ろは森になっていて抜けると海が見える草原があった。

もちろん俺が見つけた訳ではなく、走り込みのついでに担任を追いかけていたからだ。こんなけもの道を通って絶景を見つuckerだなんて普通の人間が出来るわけないだろ。

「ほう、それは私が普通でないといいたいのかエイム」

怒り混じりの声が俺を威迫してくるが知らない振りを通すしかない。さて、そろそろ帰ろうと踵を返すと肩を掴まれた。

「まあ、待て。せっかくここまで来たんだ。特別補習をしてやろう

……特に礼儀のな」

グツバイ、ブレックファースト。

ハロー、サポメンタリー。

☆

朝食の時間は全て補習という名の地獄のような筋トレをさせられた。飯を食うどころか体を動かすのすら辛い。なんとか教室には辿り着いたがこんな状態で授業など受けられる筈がなく、午前中は全て寝て叩き起こされるの繰り返しだった。

ようやく昼食になり、食堂へ駆け込む。一番乗りを果たし、大量の昼飯を腹に搔っ込む。朝飯が入っていなかった分沢山食べ、栄養を体

に回す。

それと今の俺を見た女子が

「いっぱい食べるね〜私のおかずもあげるよ」

「私のもあげるよ」

と、どんどんおかずを寄付してくれた。なんて優しいのだろう。神はいなくても天使はいたようだ。

☆

さて午後の授業だが腹一杯のままでは集中して授業も受けることは出来ないで寝ることにした。当然叩き起されては、また寝るの繰り返しだった。

そうしているうちにもう放課後となった。相変わらずやることもないので昨日と同じくぶらつくことにした。

昨日は運動部を見たので、今日は文化部を見てみることにしよう。昨日のポスターを見た時に大体の場所が掲示されていたので、記憶を頼りに校舎を歩く。

そういえばあの生徒会長は何処まで本気だったんだろうか。もし本気で俺を生徒会に誘っているならそれももしかかもしれないな。

「あれ〜レーミン? どうしてここにいるの?」

振り返ると同じクラスの布仏が立っていた。特にここにいる理由はなく、部活見学をしようとしていたところだった事を伝える。

「へえ〜レーミンも部活に興味あるんだね〜。私も裁縫部に入ってるんだよ〜」

裁縫部、そういうのもあるのか。ところでレーミンとは俺の事をいつているのだろうか。まるでフィンランドの楽しそうな一家の名前みたいだ。

そういえば、布仏は生徒会を知っているのだろうか。なかなかに奇抜な髪をしていたので話題にはなるだろう。

「それなら任せてよ〜。これでも私は会員なんだよ〜」

それは意外だ。おっとりしている子が生徒会なんて真面目なとこ

ろにいるなんて。

どうせいつかは見ることになるのだし、先に生徒会に行ってみてもいいだろう。

布仏に案内を頼み、生徒会に向かう。校舎の一番端にあり意識しなければ何処にあるかわからないような部屋だった。

ノックをして部屋に入ったものの、部屋に誰も存在せずプリントが乱雑に散らばっているだけだった。

布仏は申し訳なさそうに謝っていたが別に布仏のせいではないし、むしろ俺が頼んだのだから俺の方が悪いくらいだ。

布仏は俺の謙虚さを笑っていた。そんなに面白いものなのだろうか？

★

俺の名前はエミヤ シロウ。所謂転生者であり、特典として能力をもらったりにしていたんだが……今はそんなことはどうでもいい！

目の前にいるアイツ！のほほんさんといちゃいちゃしているアイツは何なのだ！大体原作でものほほんさんとは仲良くなるきっかけなんて無いはずなのにアイツは一体何をしたというのだ！

このままでは俺ののほほんさんが取られてしまうではないか！ぐぬぬ…何か手はないか。

…はっ！そうだ！

のほほんさんがアイツに期待している

↓俺がアイツに勝負を仕掛ける

↓のほほんさんの目の前でアイツをボコボコにする

↓アイツの弱さをわかったのほほんさんがアイツを切り捨てる！

↓のほほんさん「強い！素敵！抱いて！」

↓俺氏「完 全 勝 利」

完璧な作戦だ。ふっふっふっ…見ていろよ、この俺の実力をなあ！

☆

生徒会長はいないみたいだし、まだ来ていないみたいだから布仏と世間話をしていた。よくかんちゃんという女子の話をしていたのだが、何故かいきなり知らない男子から声をかけられた。

「おまえ！名前は何なんだ！」

自分の名前とクラスを言うのとそれに乗じて布仏も自己紹介してた。こっそり目の前にいる男子は誰かと聞いてみるが布仏も知らないようだ。

「俺は3組のエミヤ シロウだ！レーン、俺はおまえに決闘を申し込むぞ！」

随分と唐突な申し込みだな。あいにくと俺は生徒会長を待っている。今は無理だと言っておく。

「ほう、逃げるのか？まあ俺が強すぎるし仕方ないことだがな」

別の日なら構わないと言うべきだったようだ。そもそも決闘する理由もなければ、決闘を申し込まれるようなことをした覚えもない。という訳でエミヤと決闘をする気がない。

「なっ、ふざけているのか！」

別に巫山戯ている訳ではないし、理由もなく決闘をする方がおかしいだろう。中世の騎士ではあるまいし。

エミヤは何が何でも決闘をしたいようだが俺はどっちでもいいので布仏に決めてもらうことにした。

「私〜？そうだな〜レーミンの強さが知りたいしやってほしいかな〜」

どうやら期待されているようだ。期待に応えるためにも決闘に挑むことにしよう。

「ぐぬぬ、のほほんさんに期待されているとは。…ふん！今週の土曜日だ、その日にアリーナで貴様のI Sを沈めてやる！」

前半の方が小声で聞こえなかったが、後半部分がしっかり聞こえたので問題ないだろう。そういえば午後からか午前からのかを聞き忘れてしまった。聴き直そうとすると既にエミヤは去ってしまったようだ。

まあアリーナでずっと待っていていればいいだろう。
「ほうほう、これはいい事を耳にしたなあ…」

☆

それから一時間くらいして生徒会長が会計の人に引き摺られてやってきた。後から聞いたがメガネをかけた会計の人が布仏の姉らしい。生徒会の中で仕事をもっとも多い人物だそうだ。

「あれ？エイム君がどうしてここにいるの？」

せっかくだし見学してみようと思つて布仏と一緒に来たのだ。しかし生徒会長が来ないので布仏と暇を潰していたのだ。

「あらそうだったのね。それで生徒会に入る気になつたのかしら？」

布仏もいるのだし入つてみてもいいだろう。どうせ暇なのだからこういった活動も悪くない。

「じゃあ早速私の代わりに書類を…」

「会長…？」

「…というのは冗談で。君には書記を担当してもらおうかな。やり方はうつほちゃんから聞いてね」

「はあ…全く会長は。えつとレーン・エイム君よね。私は布仏 虚、そこにいる本音の姉で生徒会の会計を担当しているわ」

一応名乗り返しておく。そういえば布仏は何の担当をしているのだろうか。

「私は書記担当だよ」

「…一応言うけど本音にやらせると仕事が増えるから私がやっているのよ」

「そうなんだよね」

確かに布仏は書記なんて真面目な仕事を出来るとは思えない。なら思ったのだが副会長は誰なのだろうか。生徒会長や会計、書記がいるが副会長だけがないというのは不自然だろう。

「…すみませんがそれは話せません。こちらにも事情があるのです」

布仏先輩が言いつらそうに答える。どうやら聞いてはいけなかつ

たようだ。

「別にいいんじゃないかな。今は男でISに乗る人が多いんだし」

「しかし、会長！」

「ね、レーン君。お姉さんとの約束が守れるなら教えてあげるよ」

何故男性パイロットが増えたことが関係するのだろうか。もしかしたら副会長は男なのか？

気にはなるが布仏先輩の顔があまりいい顔をしていないので聞くのを辞めることにした。

「……ふくん、そつかあ。じゃあ仕方ないね」

「すいません、これは極秘情報なもので」

自分の興味本意で他人が嫌な思いをするのは嫌だし、布仏先輩に申し訳ないと思う。

とりあえず話を戻し、布仏先輩から書記の仕事内容を聞いてみる。まずやることは基本的に会議の際に配布用のプリント作成や発言のメモを取ることに。それ以外の活動は基本的に無く、特別な場合は連絡をするということだ。一応、連絡用にスマホを取り出し連絡先を教えもらった。

今日からの仕事はなく月の終わりに定例会議があるので忘れないようにと釘を刺された。

生徒会の活動も終わり、時間はちょうど6時半を回っていてお腹も減ってきた。

わざわざついてきてもらったお礼に布仏には夕食を奢ることにした。「デザートがいっぱい食べちゃうからね」と言われたので食べすぎると太るぞ、と注意したら落ち込んでいた。

女心とは難しいものだな。

☆

夕食を終えて、部屋に戻るとシャワーを浴びた後なのか、全裸の眼帯の女の子がいた。正確にはバスタオルが巻いてあるのだが。

早く服を着ないと風邪を引くぞと言っておいた。

眼帯の女の子は見た目は可愛いくとも心は男なのだから興奮などしない。事情を知っているし、何年も一緒にいるのだから家族も同然で妹の裸を見るようなものだ。
らつきーすけべなどではない、だから俺のことを蹴り飛ばすのはやめるケンケドウ。

☆

朝起きてトレーニングをして、朝食を取って授業を受ける。昼飯を食べてから午後の授業を受けて、放課後は適当にぶらつく。

次の日もほとんど同じように過ごし、金曜日が終わり、土曜日が来る。

今日は予定していたエミヤとの決闘だ。しかし午前とも午後とも聞いていなかったので早めに部屋を出て支度をしておく。

本格的なISの戦闘は久しぶりだ。ニュースになってから手続きで忙しく金髪君と試合をしたのが三ヶ月近く前になる。感覚を忘れないようにイメージトレーニングをしていたがそれでも完全とは言い難い。

しかし、ここまで来たらどうしようもない。男は意地だ、無理でもやるしかない。

とりあえずアリーナに着いたが、朝から人がごった返しになっている。2年生の人達がISの練習をしているみたいだった。

近くに布仏先輩がいたのでいつまでやっているのかと聞いてみた
が

「午前中はずっと2年生が使っているわ。午後からは…えっと、誰かが確保してみたいんだけど誰かはわからないわ」

と教えてくれた。おそらくエミヤが用意してくれたのだろう。しかししまったな、これでは手持ち無沙汰になってしまった。

仕方ないしISの調整でもしておくか。確か整備室は隣にあったので向かうことにした。

☆

辿りついてみると、2人ほど既にいるようだ。

片方は水色の髪をした女子で生徒会長かと思ったが髪型も髪飾りも違うので別人だろう。もう片方の男子は見たことない奴だったがどうせ転生者だろう。

水色の髪の女の子はISを整備しているようだが、横から必死に男が話しかけている。

まるで鬱陶しいナンパにからまれているような構図だ。

助けるというわけではないが、声を掛けてみる。

「は？誰だよお前」

「…隣なら空いてるし、好きにすればいい」

顔をみたが少し生徒会長に似ていた。姉妹だろうか。とりあえず男を無視して隣のコンソールを起動させて、俺のISに接続する。

「無視してんじゃねえよ」

いきなり肩を掴まれた。エミヤもそうだったが肩を掴むのは転生者特有の挨拶なのか？

とりあえず振りほどき、相手の顔を見てみる。

「お前さ、俺が何してると思ってるの？」

ナンパじゃないのか？

「違えよ！俺はな、簪ちゃんの手伝いしてるんだよ。だからお前みたいな転生者が邪魔をするんじゃねえよ！」

水色の髪の女の子（簪ちゃん）から見えないように俺の腹を殴りつける。ノーガードだったせいで腹の中身を少し吐き戻してしまう。

「ちっ、きったねえな！」

俺を殴り付けた奴は急いで何処かに立ち去っていったようだ。

殴り返してやろうと思ったがまだ立ち上がることが出来ずにいた。

「大丈夫!？」

心配になった簪がこっちにやってきた。汚いから近寄らないほうがいいといって突き放す。

少ししてから体調が戻ったので、立ち上がって近くの掃除用具を

使って自分の出した物を拭き取る。

「…あの、ありがとう」

助けた訳ではなのだが、結果的にそうなってしまっただけで別に正義の味方では無いのでお礼はいいと言った。

「…受け取って」

スポーツドリンクを渡された。どうやら簪なりのお礼なのだろう。口の中が苦しかったので有り難く頂いた。

全く、今度会ったらアイツは殴り返してやる。

★

ちっ、せつかく誰も手を出して無いうちに簪ちゃんを俺の物にしよ
うと思ってたのに…誰だよアイツは。

俺のハーレムの邪魔をしやがって。まあ、いいさゲロ吐いたような
情けない男なんかを簪ちゃんが好きになるわけがないしな。

「ふくん、君かな？私の大事な妹に手を出した上にうちの書記を殴っ
たのは？」

あれ？何で楯無がここにいるんだ？原作じゃこんな場面無いはず
なのに。

まあどうでもいいや、結局は俺のハーレムに加わるんだから先に攻
略しても……

「跪きなさい」

「ガハツ…何しやがる！いきなり蹴りやがって」

この野郎、俺の特典さえありやこんな奴の心なんか…

「黙りなさい」

「グハアツ」

こ、この野郎…覚えて…やが…れ…

☆

あの後、俺はISの調整をしていた。と云っても本格的なものでは

なく異常がないかを確認する程度だった。特に問題はなかったの
思ったよりも早く済んでしまった。

仕方ないし、少し早い食堂で昼飯を取ろうと思ったら簪から

「…さっきのお礼。おごらせて」

と言われた。

別にそこまでしなくていいのだが、断ろうと思っただが簪もなかなか
譲らない。

俺は諦めて奢られることにした。

その日の昼飯はいつもより少ない物にした。

「この前より少ないね」と言われたが、あの時は朝飯を食べてなかった
だけで別に簪に気を使っているわけじゃないと返した。

その後少しゆっくりしていると金髪君から声をかけられた。

どうして女子といえるのかと尋ねられたので簪が事情を説明してく
れた。かなり話を盛っているが俺がただ殴られただけなんだがな。

金髪君は頭を抱えて悩んでいた。

「もう少し気を配れ。お前は昔から不用心すぎる」

と言われたが、俺が不用心なんじゃなくていきなり殴って来た向こ
うが悪いのだ。

「不良に何か言ってもお前が殴られないわけじゃない。自分の身は自
分で守れるくらいにはなれ」

と正論を言われてしまった。返す言葉がなくて詰まっていると簪
が代わりに反論しはじめた。

「…この人は私を助けてくれた。だから悪く言わないで」

「別に悪く言う気は無い。ただ忠告しておいただけだ」

金髪君は昔からこうだ。口は悪いがちゃんと心配した上でこう
言っているのだ。だから金髪君なりの優しさなのだろう。

それを簪に伝えると

「…ツンデレ?」

「違うー断じて違う!!」

「…やっぱりそうなんだ」

「違うと言っているだろうが!」

珍しく金髪君が慌てている姿が見られたので面白かった。そういえば金髪君は午後の予定あるのだろうか。もし無いなら俺の試合を見に来ないかと誘った。

「…さっき俺が何を言ったか覚えているか？」

無用心すぎるって話だろ。これもエミヤがいきなり言ってきただけで、俺は何もしてないんだよ。

「はあ、お前という奴は。…次から無闇にISでの戦闘に参加するな。下手をしたら死ぬぞ」

「やっぱりツンデレなの？」

「違うと言ったぞ!!」

簪と金髪君は大分仲良くなったみたいだ。良かった良かった。

☆

予定の時間になったのでアリーナに向かっていた。ついしてみるとかなりの人が観客席にいる。一体何があったと探してみるとポスターに大きく

「男性パイロット同士の対決!」

と大きく載っており、さらにその近くで食券をかけて賭け事をしてるようだ。

どうやら知らぬ間に大事になっていたみたいだ。

「ふん…どうやら逃げずに来たようだな」

いつの間にかエミヤも来ていて、ISスーツを着て準備を終わらせていた。

俺も速く準備をしなければな。

更衣室に入り自分のISスーツを取り出し着替える。俺のISスーツは普通のはかなり違い、宇宙服をスリムにさせたような形をしている。本来なら被ることのないヘルメットまであり、何故かこれをつけないとISに乗れないのだ。

わざわざこんな物をつけないといけないのだから大変だ。

ISスーツを着込み、更衣室を出るとエミヤが待ち構えていた。

「どうにもルールを説明するために待っていたそうだな。」

ルールは基本的な試合と同じでシールドエネルギーが無くなる、もしくは降参したほうが負け。

制限時間はないが、無理に逃げ回るような真似をするなど言ってきた。俺のISは逃げられるような性能をしていないんだよなあ。

「これから2分後ジャストに試合を始める。さっさとISを起動させるんだな」

と言って反対側の出発口に向かった。

さて、俺もISを起動することにしよう。

オデュッセウスを身に纏い、その上からペーネロペーユニットが接続する。機体はかなり大きいせいでアリーナへの入口がギリギリ通れるかどうかだった。

なんとか上手いこと体を捻り通ることができたが二度としたくはない。

アリーナには既にエミヤがいたようだ。エミヤのISは金髪君と同じようにほとんどの装甲が存在せず、赤いコートを着ているだけに見える。

つまりそれはほとんどの武装が量子化されている状態なのだから、何が来てもおかしくないということだ。

まずは、様子見からだ。

「ビィィィィ」

試合の始めを告げるアラームが鳴り響く。

まずは横手に周り、エミヤの動きを見る。

すると奴はその場で何かを喋り始めた。

『I am the bone of my sword.

Steel is my body, and fire is my blood.

I have created over a thousand blades.

幾たびの戦場を越えて不敗——

何を言っているかよくわからない。しかし、嫌な予感がする。得体の

のしれない何かを感じる。

Unaware of loss.

ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし

Withstood pain to create weapon
担い手はここに独り

作戦は変更だ。エミヤには何もさせない。メガ粒子砲で一撃で落とす。

動きを止めて砲塔を構え、目標を定める。

waiting for one's arrival.
剣の丘で鉄を鍛つ

I have no regrets. This is the only path.
ならば我が生涯に意味は不要ず

My whole life was
この体は、

これ以上喋らせるつもりはない。メガ粒子砲をエミヤに向けて放ち、直撃コースに入っていた。

"unlimited blade works"
無限の剣で出来ていた』

ドガアアアアン

俺の放ったメガ粒子砲は完全にエミヤを捉え、打ち抜いた。しかしエミヤは盾を構え、そこに立っていた。

★

ハハハ、馬鹿なやつめ！わざわざ俺に詠唱の時間を与えとはな。

アイツの攻撃もこの熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）なら防ぐことが出来る。

勝った！奴に勝ち目はもうない！

「やったぞーこれで俺の——」

そう確信した瞬間、俺の体がいきなり爆発した。シールドが発動し身を守るが、シールドエネルギーが削られる。

「…な、何で急に」

いつの間にかアイツのISがこっちに急接近してきて、このままではぶつかる。

トレース・オン
「投影開始！是、射殺す——」

武器を投影する間もなく、巨体に弾き飛ばされる。そのまま後ろの壁に叩きつけられた。

「へ、この野郎が…」

もう1度武器を投影しようとするが、そんな隙を許してくれず、もう1度巨体が体当たりをかましてくる。壁と巨体の間に挟まれエミヤ自身にも圧力がかかってくる。

シールドエネルギーはもう残り僅かなところをペーネロペーは無慈悲にもライフルで打ち抜き、シールドが発生したためエミヤのISのシールドエネルギーは無くなった。

「ビィィィィ」

今度は終わりを告げるアラームが鳴る。

結果はレーン・エイムの圧勝で終わった。

☆

やはりと予感は当たっていた。

メガ粒子砲すら防ぐ盾があるということは予想していなかったが、同時に打ち出したミサイルが盾を避けて横からエミヤに直撃してくれた。お陰で隙が生まれ間髪を容れずに体当たりを食らわされた。もし特典を発揮されていたら勝ち目はなかっただろう。

金髪君にも1度やったことはあるが、攻撃に手を回しすぎると必ず隙をつかれてしまう。

きつと2度目は成功しないだろうが、その2度目もないだろう。

ゆっくりとピットに戻り、自分のISを脱ぐことにした。せつかく勝ったのだし、金髪君には飲み物を奢って貰おうか。

ふう、今日は疲れたなあ。

★

「なあ、アイツのこと誰か知ってるか？」

「あのデブいISに乗ってた奴だろ？確か1組にいた気がするが」

「エミヤを倒すとか結構やるYO！アンリミテッドの詠唱が完成したからノーチャンだと思ったわ」

「アイツって特典はなんだ？」

「何も使ってなかったゾ」

「あのISその物が特典じゃないのか？」

「じゃあ大したことないな」

「おっ、そうだな」

エミヤを特典を使わずに勝利したという事実は転生者の間で評価されていた。完全な実力だけでエミヤを倒せる、パイロットとして優れた能力を持っていると認識されていた。

☆

エミヤとの決闘が終わり、俺についての噂が少しずつ流れ始めた。

エミヤに圧勝した男と言われることもあれば、偶然勝っただけとも言われる。

俺はエミヤとの戦いは布仏から期待されたから戦っただけで特に思うことは無い。強いていうなら布仏が奢ってくれたスイーツが美味しかったことだ。勝ったから食べる事ができたと考えると勝利の味がした気がする。

エミヤについてだが転生者の中でも強い部類だったはずが俺に負けたことで評価が転落したようだ。たった1回の勝負で強い弱いを簡単に決めていいものだろうか？

ともかくエミヤとの戦いは終わったが来週の日曜にはクラス代表決定戦があるのだ。改めて気を引き締めなくてはならない。

特に俺のISは他の人にバレているのだから不利になる。俺も他の人のISを探ってみるか。

☆

情報を探るといったものの簡単にはいってない。金髪君に頼んでオルコットについての状態はわかったが他の2人についてはほとんど分かってない。

織斑は専用機を与えられると聞いたが、その専用機が届くのがちよ

うど日曜日。つまり誰にも情報がわからないということだ。

もう一人の方、転生者である刹那・F・セイエイについては全く手がかりが掴めなかった。金髪君は特典を貰っている可能性があるから気を付けると言っていた。

エミヤの時には特典を使わせる前に倒したが、特典を発動したら俺の方が圧倒的に不利になる。

やはりこちらから攻めて特典を封じて倒すしかないだろう。

そんなことを授業中に考えていたら担任に叩かれてしまった。そういうば最近までもに授業を受けた覚えがなかった。

3話

午前の授業を終えた俺は珍しく織斑から昼飯を誘われていた。

どうにもクラス代表者決定戦についていろいろと聞きたいいらしかった。

「そういえばこの前の試合見たぜ。あんなふうにISを使いこなすなんていつ練習したんだ？」

そりやあ会社で、とは言えなかった。俺が乗っていた時期はニュースで発表される二年近く前なので矛盾がいろいろと起きてしまう。

眼帯の女の子から教えて貰った、ということにしておいた。

「あのさ、頼みがあるんだ。俺にISの乗り方を教えてくれないか？」
そういえばこいつは一般人だったな。

周りの人間がほとんど転生者だからISに乗るのなんて当たり前だと思っていたがそうではない。織斑は特典どころか転生者ではないのだ。

力もなく新しい環境に慣れてないその姿は昔の俺に似ていたので、手伝ってやることにした。昔は俺も金髪君に助けられたものだ。

とは言え俺は教えられる様な技術がない。なので…



私、いや俺、キンケドウはちょうどクラスメイトと話ながら昼飯を食べていた所だった。

いきなり「今すぐこっちに来てくれ」というメールがレーンから届いた。

昼飯を投げ出して急いで来てみたら織斑にISの乗り方を教えてやってくれと言ってきたやつがった。

「ふざけてんのか!？」

「あはは、やっぱり駄目か」

「いや、織斑に言ったんじゃないやなくてな…。ったくよ、こういうのはちやんと言ってくれ」

心配したじゃねえかよ。すぐ来てくれなんて言われちゃ何かあったかと思うじゃねえか。

「…はあ、貸一だからな。ちゃんと返せよ」

「あ、ありがとうな。ちゃんと返せるように頑張るよ」

「いや、織斑は返さなくてもいい。この男にキツチり返してもらわらん」

レーンには買い物の一つや2つ付き合っつて貰わなければ対価に合わないからな。何が何でも買い物には付き合っつて貰うぞ。

☆

貸一つということでキンケドウに織斑にISの指導を約束してもらった。

貸一というのは昔から何かを奢るとというのが俺と金髪君と眼帯の女の子の間では定番だった。まあ、布仏から教えて貰った裏メニューのスイーツでも奢れば充分だろう。

「あのさ、本当に良かったのか？キンケドウさん結構怒ってる風に見えるけど」

織斑がオロオロしながら聞いてきた。別に何の問題もない。眼帯の女の子も金髪君も俺のことをぞんざいに扱ってくるのはいつものことだ。気にすることではない。

それよりも自分のことを考えた方がいいだろう。今週には試合があるのだ、例え織斑でも手を抜く気はないぞ。

「おう！それはこっちもだぜ！」

意気込みは充分だった。あとはキンケドウに任せておけばきつと強くなれるだろう。

ちなみに話をしていたら午後の授業は遅刻した。

☆

いよいよ明日はクラス代表決定戦だ。

体調を整える為にも早く寝ようとしていた夜に突然来客がきた。その来客は転生者だが今まで関わった覚えもない。一体何のようだろうか。

「あんたがレーン・エイムか？俺はロックオン ストラトス。ロックオンとでも呼んでくれ」

はあ、これはどうもご丁寧に。

挨拶をするならもっと早い時間にして欲しかったものだ。

それで何か用件があるのか？

「おっと、それは悪かったな。そうだな、単刀直入に言わせてもらおうか。……刹那・F・セイエイの情報は欲しくないか？」

セイエイの情報……？そんなもの一体どうやって手に入れたんだ。それにわざわざなんで俺に教えてくれる。

「刹那は昔からの知り合いでな。ああ、勘違いするなよ。別に友達な訳じゃない。それとあんたに教える理由だが……まあぶっちゃけていうと情報を渡す代わりに仲間になって欲しいってとこだ」

なるほどセイエイの昔を知っているということか。なら特典のことを知っていてもおかしくはない。

しかし仲間になれ、か。

別に仲間になることに問題があるわけじゃない。だがセイエイの情報をそう簡単に渡すような奴が仲間になれば俺の情報を他の転生者に流されてもおかしくない。

何よりもそんな奴を信じる気にはならない。

「……っ！ハハ、信じるか。いたんだな、こんな転生者も。……さっきの言葉は訂正させてくれ。レーン、お前を男と見込んだ。俺を仲間にしてくれ！」

さっきまで喋っていたロックオンとは違っていた。何かに吹っ切れたような雰囲気だった。

そこにいる男は信じられる、理屈ではなく心でそう思った。

俺はロックオンに右手を差し出した。

「ロックオンってのはコードネームみたいなもんだ。本当の名前はライル・デイランディ、ライルって呼んでくれ」

ロックオンもといライルは俺の右手を握り返してくれた。
「改めてよろしく頼むぜ、レーン！」
こちらこそよろしく頼む、ライル。

☆

そしていよいよクラス代表決定戦の日。
前回エミヤと戦ったときに来た以来だが観客席はこの前の二倍近く埋まっていた。日曜とはいえみんな暇なのだろうか？

セイエイやオルコット、織斑も既に来ていたようだ。俺が来てから少しして担任がやってきた。

「全員集まってるな。今回のクラス代表決定戦だがトーナメント方式で行う。」

1回戦はセイエイとオルコット、2回戦は織斑とレーンだ。分かったらさっさと準備をしろ。」

どうやら俺の対戦相手は織斑のようだ。

生憎手加減をするつもりはないと言ったし、織斑もキンケドウに指導してもらっている。全力で戦わせてもらおう。

☆

公平性を保つために試合に出ない間では更衣室に残りモニターを見ることも禁止された。

セイエイの情報だけはライルから受け取った、いや受け取ってしまった。ライルから半ば押し付けられてしまったのだが、情報を聞いた後で聞いて良かったと思ってしまう。

それだけセイエイのISは強力なのだ。

もし織斑に勝てたなら、その次に当たるのは確実にセイエイだ。オルコットのISが何であれセイエイに勝てる確率はゼロに近い。

「ビィィィィ」

どうやら試合を始めるアラームが鳴ったみたいだ。俺もISスー

ツに着替えて準備をしよう。



我が世の春がきたあああああああ！

おっと、テンションが上がっちゃったぜ。なんたつて待ちに待ったセシリアの攻略だからな。

1組に入って、原作通りに口喧嘩もした。そしてクラス代表決定戦だ！完璧なまでに進んでいる。あとはセシリアをボコボコにして外まで運んでくれればオールOKだ！

「あら、逃げずに来ましたのね。今謝れば許して差し上げますわ」

「謝る理由などない。オレは男の意地を通すだけだ」

「それなら————— ここでお別れですわ！」

「ビィィィィィ」

戦いの始まりを告げるアラームと同時にセシリアはレーザーライフルを構え、俺に向かってビームを撃ってきた。

俺は直ぐに壁に沿うようにアリーナを旋回して回避する。

(ここまでは原作通り、ここからはオレとこの「クアンタフルセイバー」のステージだ！)

方向をセシリアに向けて瞬時加速を使って一気に接近。完全に意表を突いた攻撃にセシリアは驚愕している。

「捨て身の攻撃ですか!?!:..ならこれは避けられませんわね！」

セシリアのISの非固定装備(アンロックユニット)からミサイルが放たれる。瞬時加速したこの状態では避けることが出来ない。

セシリアは勝ちを確信し、笑みを零していた。

(ところがぎつちよん！)

刹那のIS、クアンタフルセイバーは一瞬だけ青白く光る煙に包まれ姿をくもらす。煙が晴れるとそこに刹那は存在せず消えてしまっていた。

セシリアの放ったミサイルは空を切り、そのままどこかに飛んでいってしまう。

「そんなっ！一体何処に……きゃあ！」

姿をくらましていたクアンタフルセイバーはセシリアを背後から斬りつける。よろけたセシリアに更に容赦なくGNソードⅠⅤの斬撃がぶつけられていく。

「くっ、インターセプター！」

苦肉の策としてナイフ型のブレードを取り出すも一瞬で切り裂かれてしまう。

もはやセシリアになす術はなく、クアンタフルセイバーによってシールドは幾度となく斬り付けられ地面に叩き付けられた。

それと同時にセシリアのシールドエネルギーが0になり試合が終了する。

「ビィィィィ」

今度は試合終了のアラームが鳴る。刹那の一方的な攻撃によって試合の幕は閉じた。

（クククっ、これでセシリアはオレに惚れるはず！オレのハーレムの始まりだ！）

☆

「はあああー！」

織斑のⅠⅤが再び、こちらに向かって瞬時加速をかけてくる。敢えて回避をせずに、こちらからも瞬時加速をかけて体当たりで迎えるっ。

「うおっ！」

織斑は体を無理やり捻り回避をするが、普通のⅠⅤの3倍近くあるペーネロペーの装甲を避けきれずシールドが発生してしまう。

試合が始まってから既に15分以上は過ぎていた。

最初の5分で決着は付くと思っていたが織斑のⅠⅤが一次移行（ファーストシフト）をしてからは一気に形勢が逆転した。

織斑の覚悟によってか、動きはそれまでとは全く変わり、ペーネロペーを速さで圧倒していた。

ファンネルミサイルやビームライフル、ビームサーベルの噴出口までもがすべて切り裂かれてしまったのだ。メガ粒子砲の発射口は残っているが牽制をする武器がない以上当てるのは困難。

ここまで見ると織斑の勝利が確定されたようなものだった。しかしペーネロペーの持つ装甲を織斑の雪片式型では完全に切り裂くことが出来ず、シールドエネルギーを消滅させる零落白夜を活かすことができない。

その結果、織斑は何とかしてペーネロペーの装甲を削りとりとうとし、レーンは装甲が無くなる前に織斑のシールドエネルギーをなくそうとする泥仕合になってしまったのだ。

(不味いな、このままじゃこっちのシールドエネルギーが無くなる)

装甲を持たない織斑のISは少しずつだが削られていた。無論レーンの方が無傷な訳ではない、しかし分厚く固められた装甲を切り裂くのは困難だった。

(なら、この一撃にかける！)

織斑はさつきからある一点だけに集中して攻撃をしていた。その部分は僅かながらも装甲を削りとっていった。そしてあと一撃で装甲を貫通しそうだ。

次の攻撃を通し零落白夜を発動すること。織斑の勝ち筋はこれしか残ってなかった。

気合いを入れ、レーンと向かい合う。

「いっげ、レーン！」

織斑は瞬時加速をかけてレーンへと向かっていく。さつきとは違いレーンはどつしりと構えこちらを待っているようにも見えた。

「いっげええええ!!」

レーンに突っ込む形で急接近した織斑は狙っていた一点に雪片式型を突き刺すことができた。

「零落ウ白夜あああ！」

突き刺した雪片式型の零落白夜を発動させ、ペーネロペーのシールドエネルギーを消滅させようとした。

しかし、織斑の攻撃は当たるとはなかった。

ペーネロペーは身に纏う全ての装甲を切り離して織斑の攻撃を避けたのだ。結果として織斑の攻撃は不発となり無駄にシールドエネルギーを消費しただけだった。

装甲をパージしたペーネロペー、もといオデュッセウスが織斑の目の前に現れる。

そのままの勢いでオデュッセウスは織斑を殴り飛ばし、シールドエネルギーが0になる。

「ビィィィィ」

試合は誰も予想していない形で終わった。

誰もがレーンによる一方的な攻撃で織斑は負ける、みなそう考えていた。

しかし織斑が番狂わせを起こしたのだ。転生者が誰も考えなかった織斑の逆襲に皆こう思った。

(やはりラノベ主人公は伊達じゃない…！)

☆

想像以上の激戦に俺は疲れていた。まさか織斑がここまでやるとは思っていなかった。

キンケドウに指導させれば少なくとも戦える程度にはなると思ったが冗談ではない。キンケドウの動きを完全にコピーして戦っている。

初心者のような不慣れな部分は一切見えなかった、ということにはキンケドウが無理矢理に詰め込んだのだろう。しかしあれは一週間やそこらでは身に付く動きとは思えない。それだけ織斑は力を持っていた。

やはり世界最強の弟だけあって血をしつかり継いでいるようだ。

ベンチに横たわり、体を冷やすものなかなか熱が離れない。

ひやり、頭に冷たいタオルが乗つけられる。一体誰だと思いたい体を起こすとそこには生徒会長と布仏先輩がいた。

「レーン君、体は大丈夫？」

試合終了後、次の試合が控えているというのに俺のISは中破していた。そこで先輩達が整備室を貸し切り、メカニックとしてペーネロペーを修理してくれたのだ。

本当に頭が上がらない。先輩達がいなかったら次の試合に出るところが怪しかったところだった。

立ち上がってお礼を言おうとするが、急に立ち上がったせいで体がふらつき倒れそうになる。布仏先輩に支えてもらいベンチに座らされる。

「今はゆっくり休んでください。私達が整備をしておきましたから」
本当に先輩達には頭が上がらなかった。

申し訳ないと理解した上で先輩達に頼み事があった。

次の試合でセイエイに勝つためには今のペーネロペーでは勝てない。ライルから教えて貰った情報だけでは足りないのだ。

そこである『秘策』が浮かんだ。先輩達にはその準備をして欲しいのだ。

「レーン君、悪いことは言わないわ。そんなことは辞めなさい」
生徒会長からストップをかけられてしまう。

しかしそれでは勝てないのだ。セイエイに勝つためにも俺は…
「なら聞いわ。あなたはどのようにしてそこまで勝ちに拘るの?」

理由ならある。

俺を信じてくれたライルのため。

負けた織斑に恥ずかしい姿を見せないため。

そして、こんな俺に力を貸してくれた先輩達の行動を無駄にしないためだ。

俺は一人で戦ってるわけじゃない。

色んな人が支えてくれたおかげで戦えるんだ。

だから俺は勝ちたいんです。みんなの為に。

「はあ、全く。こんな風に言われたら断れないじゃない。うつほちやん、お願いしてもいい?」

「正気ですか?下手をしたら大怪我では済まないですよ?」

「構わないわ。責任なら私が取るわ」

「…分かりました。レーンさん、決して無理をしないでください。」
無茶ならしてもいいのだろうか？

「駄目に決まっています！…もう一度言いますけど決して無理も無茶もしないでください！」

分かっていますよ、俺だって大怪我するつもりはありませんから。それよりもさつき言ったことの準備をお願いします。

「…分かったわ。けど準備している間くらいはレーンさんも休んでいなさい」

先輩達の言葉に甘えて再びベンチに寝転がる。やはりまだ疲れが残っているせいで俺は直ぐに寝てしまった。



セシリアを倒して攻略が終わった俺にとって残りの試合は消化試合に過ぎなかった。

織斑とあのレーンとかいう転生者のどっちが勝とうとどうでもよかった。どちらもこのクアンタフルセイバーに適うはずも無く、オレが勝つと決まっているのだから。

(しかしエミヤを倒すくらい強いと聞いたが、どうやら織斑に苦戦していたとは。原作キャラに苦戦するとか本当に転生者かよ)

苦戦したというのは山田先生に聞いた話だった。織斑千冬から釘を刺されたが、どうせ俺が勝つんだから相手の事を知ってるも知っていないも変わらないだろうに。一々うるさい奴だ。

俺はピットから出撃し、アリーナに出た。

既にレーンもアリーナにいてどっしりと構えていた。織斑が傷つけた装甲も新しいものに整備されていた。

こちらのクアンタフルセイバーも調子は万全だ。むしろセシリアの戦いで体が慣れて来たところだ。

改めて戦闘態勢になり、レーンを睨みつける。

「ビィィィィ」

試合開始のアラームと同時に瞬時加速を使って敵のISまで急接

近する。

(どうせ転生者だ！容赦はしない！)

レーンは迎え撃つようにビームライフルをクアンタフルセイバーに向けて撃ち続けるも、刹那の非固定装備(アンロックユニット)であるソードビットによつてビームは防がれていた。

しかし度重なるビームライフルの攻撃によりソードビットは全て壊れた。

そして刹那のISに向かってビームが撃たれる。

このままでは直撃する所を、セシリアとの鬪いと同じように青白い煙と共に姿を消してしまう。

急に敵が消えたことによつてペーネロペーは慌て初め、警戒し始めた。

(ハン！ただの弱え転生者か。さっさと終わらせてやるよ！)

刹那が現れたのはレーンの真後ろだった。

手にはGNソードIVが握られ、今にも斬りかかろうとしていた瞬間、ペーネロペーがいきなり後ろを振り向きこちらを見つけた。

(なっ！馬鹿なそんな簡単に見つけられるわけが)

ペーネロペーの腕からは異常なまでに出力を上げられたビームサーベルが噴出していった。

振り返ると同時に薙ぎ払われたビームサーベルによつてGNソードIV諸共切り裂かれ、クアンタフルセイバーのシールドエネルギーが一瞬で削られた。

(こいつ、俺の動きを読んだのか!?)

☆

「それで刹那の情報だが」

時間は昨日の夜、俺はライルから刹那のことを聞かされていた。正直なところ、この時は情報を受け取りたくないと思っていた。

「アイツのISは接近戦に特化されたタイプで、射撃武装はあってもアイツが使いこなせることはないな」

随分と酷いことを言うんだな。知り合いじゃなかったのか？

「知ってるだけだつて言ったろ。それに俺はああいう奴が大嫌いなんでな。…話しを戻すが、アイツは必ず近接攻撃を仕掛けてくる。絶対にだ」

何故そこまで確信できるのか。フェイントをかけてくる可能性だつてあるはずだ。

「理由ならある。アイツの特典だ」

特典？セイエイの特典が一体どう関わってくるのだ。

「アイツの特典は——『量子化』だ」

量子化だと？確かにISには武器を量子化することで機体を軽くする技術はあるが、人を量子化なんて出来るわけがない。

「そうだ、普通ならありえないことをする。それが特典なんだよ」

羨ましいものだ。俺やキンケドゥには特典なんて持っていないというのに。

「…え？今特典が無いって……まあ今は置いとくが、刹那の特典『量子化』のせいであらゆる攻撃はすり抜けちまう。だから簡単に近寄れるし、接近戦も出来る」

じゃあ俺のペーネロペーじゃ歯が立たないじゃないか。

「まあ聞けよ。刹那の特典は強い、だが刹那自身は決して強いわけじゃない。特典を使ってくるなら刹那は必ずこちらの“死角”を狙ってくるはずだ。初心者が一番考える方法だからな」

なるほど、逆に近寄らせてカウンターを決めるといふことか。刹那もカウンターされるとは思ってもいないだろう。

「だがこの戦法は1回限り、よくて2回出来たらいい方だ。それ以降は警戒されて何をして来るかさっぱりわからん。もう一度量子化するのか、それとも射撃をしてくるのか、こればかりは予想ができねえ」

流星に同じ手を使えば怪しまれるか。

しかし確実に攻撃が出来るならこっちのほうが圧倒的な有利になれる。

ならセイエイに対して攻撃するならビームサーベルか？範囲が広

いメガ粒子砲か？

ビームサーベルでは出力が足りないし、1回の攻撃程度ではシールドエネルギーを削ることも難しい。

メガ粒子砲では出力が高くても発射までに時間がかかる。それでは攻撃のチャンスが潰される。

間をとってビームライフルならと思ったが、そもそも出力が足りない。ミサイルも同じだ。

せっかく攻撃のチャンスがあるというのに、俺のペーネロペーではどうしても短期決戦に向かない。何かいい案はないかとライルに聞いてみる。

「そうだな、俺なら――」

☆

「――シールドエネルギーをビームサーベルに回して無理矢理出力を引き上げる？」

ライルの出した「秘策」とはこれだった。

出力が足りないなら補えばいい。こちらもしールドエネルギーを消費することにはなるが、総合的に見れば相手のほうが消費量は大きい。

、総合的に見れば相手のほうが消費量は大きい。

「二応出来ることは出来るけど……すごく危険よ。本来のビームサーベルより出力を上げたら武装が自壊してしまうし、そのダメージを間近で食らうことになるのよ」

だが1回程度なら平気なはずだ。昨日のうちに社長に聞いて確認済みだからな。

その程度で壊れるような物は作って無いってな。

「レーン君、悪いことは言わないわ。そんなことは辞めなさい」

生徒会長からストップがかかる。

先ほどのやり取りのようにこの後、俺は先輩達を説得しビームサーベルの出力を変えてもらった。

ここまで来るともはや意地だった。

☆

作戦は完全に成功した。目論見通り高出力ビームサーベルで刹那のシールドエネルギーを大幅に削ることができた。

セイエイのシールドエネルギーは残り4割、俺は残り7割と言ったところだろう。

カウンターからさらに追撃をかけるようにビームライフルを撃ち抜く。回避行動が遅れたセイエイは何発かカスリ、さらにシールドエネルギーを削る。

逃げることも許さず、更にファンネルミサイルで追撃をするも、『量子化』によってミサイルをすり抜けてしまう。

俺は再び死角からの攻撃を待ち、ビームサーベルを構えた。

★

(間違いねえ、コイツはオレの特典をわかってやがる)

どこで知ったかはどうでもいい。

今はコイツをどうやって倒すかだ。

オレがこいつの死角から攻撃したのを待っていやがった。今もコイツは構えて、カウンターを狙っている。

だが同じ手をわざわざ使うわけがない。

(さつきは死角からだがな、今回は真正面からだ！)

敢えて死角から一瞬だけ『量子化』を解き、レーンの真後ろに現れる。刹那は肩にかけていたフルセイバーを取り出し斬りかかろうとし、レーンは突然現れた刹那に驚くことなくビームサーベルを振ってくる。

(ところがどっこいー！)

刹那は再び『量子化』を使い、今度はレーンをすり抜けてペーネロペーの真後ろに回り込む。

(おらおらおら！逝っちまいな！)

無防備になったペーネロペーにフルセイバーを振り下ろす。シールドエネルギーは削ることはできなかつたが装甲は完全に切り裂かれた。

更に切り裂かれた装甲の隙間にフルセイバーを突き刺さそうとした瞬間、クアンタフルセイバーは爆撃された。

(なっ！まさかさっきのミサイルがここまで追いかけてきたのか!?)

容赦なく刹那の体にファンネルミサイルがぶつけられ、その度に爆発していく。

残り少ない刹那のシールドエネルギーを削り切るには十分な攻撃だった。

「ビィィィィ」

試合は完全にレーンの作戦勝ちだった。

刹那は策にはまり、全ての行動は裏目に出てしまったのだ。

☆

ライルから教えられた『量子化』は想像以上に恐ろしかった。いくら撃とうとも全て通り抜けてこちらに向かつてくるのだ。

対策を練ることが出来たのはライルのおかげだ。もし知らなかつたら確実に負けていた。

こうして刹那はレーンの中で二度と闘いたくない相手の1人となった。ちなみにギルガメッシュもその1人だった。

「お疲れ。優勝おめでとう、レーン君」

「おめでとうございます」

ピットに戻すと先輩達が出迎えてくれた。

今回の戦いは先輩達がいなかつたら勝つことは出来なかつた。本当に頭が上がらない。

「もう、気にしすぎだよ」

「そうですよ。私達は先輩なんですから頼っていいんですよ」

しかし事実だ。ビームサーベルの出力が低ければ短期決戦に持ち

込めないし、俺だけではペーネロペーの整備も出来なかった。

この恩はかならず返させてもらおうと言った。

「おつ、じゃあ楽しみに待ってるからね〜」

先輩達はそう言うのと部屋から出ていった。

自分が着替えることを予想して気遣ってくれたのだろう。連続で試合をしたせいで汗まみれになっていて早く脱ぎたかったので助かる。

その後、俺は更衣室でISスーツを脱いだ。しかし更衣室のシャワーは壊れていたので、わざわざ寮まで戻り自分の部屋のシャワーを使った。

どうせ誰もまだ戻らないと思い、下着姿にタオル一枚羽織るような形で休んでいたところをキンケドウに見られた。

別に何も問題ないはずなのに顔面を蹴られた。痛くはないが、そうやってハイキックをするとスカートがはだけてパンツが見えるからやめたほうがいいと忠告した。

今度は脚を蹴飛ばされた。解せぬ。

☆

「クラス代表決定戦お疲れ様ー!!」

「お疲れさまー」

「お疲れ様ですわ」

「……お疲れさま」

お疲れ様です。

試合が終わったその日の夜、1組でちよつとした打ち上げをやることになった。

というのも元々親睦会をしようという時にちよつどクラス代表決定戦があったのでその打ち上げも兼ねようという趣旨だった。

「お疲れ様、レーン君！恰好よかったよ〜」

振り返るとそこには相川がいて、後ろには女子が何人か居て、こちらの顔を伺っている。

とりあえずありがとうと返しておく。

「レーン君結構強かったけど、どこでIS習ったの？」

そりあ会社で、とは言えないのでキンケドウが専用機持ちなので教えて貰ったと言った。嘘は言っていない。

「えーキンケドウさんってそんな凄い人だったんだ！」

俺なんかよりもキンケドウの方が強いよ。シミュレーションでも7対3で俺が負けていたからね。

それよりも織斑の方に聞いたらどうだ？あいつも同じキンケドウに習ったパイロットなんだからな。

「織斑君にまで教えてるなんてキンケドウさんは凄いねえ…でもそれならどうしてクラス代表に手を挙げなかったんだろう？」

昔からキンケドウは人前に立つのが苦手なんだよ。だから人見知りなんだけどな。

「昔から？レーン君ってキンケドウさんと幼なじみなの？」

ああ、そういえば小学生の頃から中学の時もずっとだな。キンケドウとギルガメッシュが隣にいるのが当たり前な毎日だったのが懐かしい。

「へえ。いやあ実はね、レーン君って女子から人気高いんだよね。見た目だったら刹那君とか織斑君の方が良いって言う人が多いけど、今日の試合見てやっぱりレーン君の方がくって子が結構いるんだよね。」

単純に物珍しさだけじゃないのか？織斑やセイエイが恰好いいとはなんとなくわかるが。

ISが強いだけで人気だなんてまるでパンダみたいだな。

そして相川さんは何故キンケドウを横目にニヤニヤしているのだ。

「別に？まあ頑張ってるね！」

そう言っつて何処かに行っつてしまう。まるで猫みたいな気分屋な人だ。

☆

打ち上げはかなり盛り上がりつつあった。途中から新聞部などがインタビューや写真などを撮られて少し疲れた。

気晴らしにベランダに出て星を眺めていた。

「よお」

声をかけてきた方向を見るとライルが缶コーヒーを2つ持ってきていた。

「お疲れさん。これやるよ」

缶コーヒーがこちらに投げられる。顔面にぶつかる前になんとか手の中に収めた。

プシュツ、と小気味いい音を鳴らして缶を開け喉に流す。さっきまでケーキを食べていたのでブラックの苦味が丁度いい。

「しかしよく勝てたな。あの刹那に」

なんだ、負けると思つてたのか？

「半分くらいはな。けどお前は勝つたんだからそれくらいは許してくれよ」

別に怒つてはいない。だが俺の仲間なのだから勝つと信じて欲しいものだ。

「…悪かったよ。今度は絶対に勝てるくらいに作戦を練つてやるよ」

その頃には頼らないでも勝てるくらいには強くなつてんだろうさ。ニヤリと笑つてやるとライルも笑い返してくれた。

「ニール！」

後ろを振り返るとオルコットがいた。さっきの誰か呼んだのはオルコットの声だろう。

セシリアはライルに向かって急に走り出し、そして抱きついた。

「…今日の試合は申し訳ありませんでした。あなたの前であんな醜態を…」

ニール？そこにいる男はライルのはずだが、一体どういうことだろうか。気になるものの当の本人がこうイチャついていては聞けない。「何言ってるんだよ。セシリアは何時だつて綺麗じゃないか」

「ニール…次こそは必ずこの手に勝利を収めます。だから見ていてください」

2人だけの空間が出来上がってしまった。どうやら俺はお邪魔虫のようだ、みんなの所に戻ろう。

「レーン・エイム、あなたを侮辱するような事を言ってしまったこと。この場で謝罪させてください」

戻ろうと背を向けた所をオルコットに呼び止められる。

俺はそんなことを言われた覚えがないので何のことだと聞き返した。

「…お優しいのですね。分かりました、あなたの好意に甘えさせていただきます」

だから何の事だか説明して欲しかった。聞き返そうと思ったが既にライルの方を向いてイチヤつき始めた。

ライルがこちらを向いて「後で話す」と口を動かした。

とりあえず今は2人の邪魔をしないようにみんなの所に戻るか。

ベランダから部屋に戻るとセイエイがベランダを見ていたようで、オルコットとライルがイチヤついているのが見えたみたいだ。

セイエイの目が白目になっていた気がするがどうでもいいので無視してみんなの所に戻った。

4話

打ち上げ兼親睦会が終わったあと俺は自分の部屋でゆっくりしていた。

ライルと後で会う約束をしたものの、まだ来る様子はない。あまりにも暇すぎる。キンケドウがせめて起きていてくれれば話し相手になってくれただろうが、すでに寝ていた。

俺の方が疲れているのだから先に寝させてくれと言いたかったが、起こすと怒るので代わりに顔に落書きをして遊ぶ。

「肉」とかいておくのもいいが、アレンジをして猫の髭を描いてやった。

我ながら上手くできたと感じる。つい上手くできたので写真を撮っておく。

「…何してるんだ？」

いつの間にかライルが部屋の中に入ってきてたようだ。イタズラに集中してたせいで気付かなかった。

「…とりあえずついて来てくれ」

了解した、だがその前に写真を撮っておこう。こういうのはそうそう出来ないのだから。

☆

先程打ち上げをしていた食堂に再び来ていた。すでに片付けは済んでいて当然誰もいなかった。

昨日の夜と同じくように端のテーブルを貸し切り、ライルは話しを始めた。

「セシリアのことなんだが、その何から言うべきか」

話しづらいことなら話さなくても構わない。

無理に話したって辛いだけだろう。

「いや、話させてくれ。これは伝えておきたいことだ」

ライルからは真剣な表情が感じ取れる。それはライルの覚悟なの

だと察した。

ライルはそつと口を開き、話を始めた。

★

俺には双子の兄がいた。名前はニール・デイランデイ、自慢の兄さんだったよ。

セシリアが呼んだニールってのは俺の兄さんのことなんだ。

兄さんはイギリスのお坊ちゃんが通うような中学に入学し、俺は日本に留学した。

それから半年後に、兄さんはセシリアという女の子と付き合うことになったという手紙を送ってきた。

流石にその時は驚いたけどな。流石、俺の兄さんだよ。

でも兄さんとセシリアの幸せは長くなかった。呆気なく終わってしまったんだ。

俺の家族とセシリアの両親が列車の事故に巻き込まれた。

生存者は誰一人として見つからなかった。

俺は葬儀のためにイギリスに帰国していた。

俺がセシリアと出会ったのはその時が初めてだった。

セシリアは俺のことをニールだと思い込んでいた。そうでもしなきゃすぐに倒れてしまうほどセシリアはやつれていた。

一両親と恋人を失うことがどれほど辛いかな、

お前にだってわかるだろう？

俺は兄さんの振りをして恋人を演じ、セシリアを支えた。

そのままイギリスに残って、セシリアの隣でずっと兄さんの振りをしていったんだ。

それからは知ってる通りISの適正を持つ俺はIS学園に入ることが決まって、そして今に至るってわけだ。

☆

「おっと、もうこんな時間か。悪いが話はこれで終わりだ。寮に戻ろ

うぜ」

ライルが席を立ち上がり、食堂を出ようとしている。俺は話を聞いてから動くことが出来なかった。

なんて理不尽な話だろうか。

つい呟いてしまう。

「そう気にするなよ。これは俺の問題なんだから」

背を向けたまま返事を返してきた。

この背中にはどれほど重たいものを背負ってきたのか想像もつかなかった。

仲間を頼ってくれ。

俺が言えたのはそのくらいだった。

「ありがとうな」

ライルはこちらを振り向くことなく食堂を出ていった。

俺は未だに椅子に座りながらライルのことを考えていた。

★

刹那はセシリアと旧友であるライルがイチャついてるのを見てから気を失っていた。

(まさか、原作が始まる前に攻略されてるとは…)

既に打ち上げは終了していたが、立ったまま気絶していた刹那に話しかける人物はおらず、食堂の置物と勘違いされて放置されていた。

仕方なく寮へと戻ろうとしようとした時、セシリアとイチャついていたライルとレーンが食堂を訪れていた。

2人共、刹那に気づかず話始める。

今、動いてしまつては気まづくなるのが目に見えていた刹那は、自分を物置だと言いついて動かずにいた。

(ロックオンにそんな事があったのか…それなのに俺は…)

中学は同じだったがイギリスに帰国してから連絡を一切取つていなかった。そんな事情があるとは知る由もない。

刹那は自分を恥じていた。ライルの事情も知らずにセシリアを攻

略するなど考えていた自分がどれほど愚かなのか。

それからしてライルは食堂を立ち去り、レーンと刹那だけが食堂に残っていた。

(くっ…足が震えてきた。さっさと帰ってくれ！)

レーンは未だに椅子に座って考えごとをしていた。勿論レーンは刹那が食堂にいることなんて知らずゆっくりと考えていた。

(早く…早く…)

この1時間程後、警備員に注意されてようやくレーンは食堂を出ていった。

☆

「という訳で1年1組の代表は刹那・F・セイエイ君に決まりました」
副担任からクラス代表が決まったことが告げられると、クラスはざわつき始める。

「先生、何で刹那君になったんですか？」

「エイムは生徒会役員としての仕事がある。だからセイエイに任命した。他に質問は？」

担任から補足される。これは校則に記載されているらしいが、今までしらなかった。

結果、トーナメントで準優勝のセイエイが1組のクラス代表となった。

「それでは、授業を始める。前回の続きからだ。」

担任からの指示でみんなノートを開いて教科書を読み始める。俺も同じように読み始めたが、内容がさっぱりだった。

2週間程、ISのトレーニングに明け暮れていたせいで授業をまともにも受けてなかったのだ。

その日も担任に頭を叩かれた。

☆

ようやく午前中の授業が終わり、食堂でゆっくりしていた。いつもと変わらず混んでいる。

適当に空いてる席に座ってから今日の日替わり定食を食べ始める。この日の日替わり定食は珍しくワンタンメンだ。

世界各国から生徒が集まるだけあって国ごとの料理もしつかり揃っていて、今日のラーメンも日本風ではなく中華系のお店で食べるような本格的なワンタンメンだ。

味を楽しんで食べていると後ろから席は空いてるかと思われかけた。とくに誰かと約束したわけでもないものでどうぞと返した。

隣に来たのはキンケドウだった。こうして一緒に昼飯を一緒に食べるのは久しぶりな気がする。

何を頼んだか聞いてみると、こつちを振り向き

「見りやあわかるだろ？」

とテーブルの上のワンタンメンを指した。

恐らく同じ日替わり定食を頼んだのだろう。

ちなみにこの時のキンケドウの顔には昨日の猫髭のいたずらが残っている。

あまりに予想していなかったので笑ってしまうと、キンケドウに不思議がられた。後で顔を洗うことを勧めておいた。

キンケドウが気づいた後に蹴られたのは言うまでもない。

☆

午後はISの実習だが、俺のペーネロペーは修理中なので訓練機でやることに。専用機持ちということとでクラスメイトに教えることになったのだが上手く教えられず、終始キンケドウに頼りっぱなしだった。

ちなみに俺の説明はまだマシな方だったらしい。セイエイの説明が酷かったらしく、みんな織斑とキンケドウによっていったそうだった。

ちゃんと俺の説明を聞いてくれたのは相川と布仏だけだった。

期待の眼差しを向けていた布仏には申し訳なかった。

ところで織斑は何故あそこまで上手なのだ？やはりキンケドウから教えられるとみんなあなるのか？

織斑を羨ましがっているとキンケドウから

「…お前にも教えてやるから」

と赤面しながら言われた。教えてくれるのは凄く助かるが、そんなに顔が赤いと心配になる。体調には気をつけろと言っておいた。

その後、キンケドウが風邪を引いたのが発覚し、俺が看護をするこ
とになったのはまた別の話だ。

☆

時間は変わって放課後、生徒会長からお呼び出しをくらい生徒会室に
いる。

「この後1年生の転校生がやってくるから、レーン君にはその子の案内
内をして欲しいの」

何故俺がというと、生徒会長と布仏先輩は事務作業でとてもじゃない
が無理。布仏は簪のところに行ってるから、空いてるのは俺だけな
のだ。

しかしこの時期に転校生とは珍しい。普通なら入学式に合わせる
と思うが、1ヶ月遅れたということは何か事情があったのかもしれない。
い。

とりあえず生徒会長から言われた場所での転校生を待つことに
しよう。

☆

指示された場所で待ってみるも転校生は一向に来る気配がない。
アリーナを使っていた生徒も少しづつ寮に戻っていくのが見えるほ
と、時間が経っている。

「あれ？何やってるんだレーン？」

ISスーツを着た織斑がこっちに來ていた。どうやらこいつもア

リーナでISSのトレーニングをしていたようだ。

生徒会の仕事でここに居ると言っておいた。

そっちは訓練をしていたようだが、どうだったか聞いてみる。

「今日は1組の人達が多かったな。キンケドウや刹那もいたし、クラスのみんなもいたぜ」

それは羨ましいな。生徒会がなかったらそっちに行つてたくらいには。といつても今はISSを修理に出しているからどっちにしろ無理だったがな。

「ハハハ、また今度誘うさ。その時は相手してくれよ」

こちらこそ宜しく頼む。

織斑は手を振つてから寮に戻っていく。俺も案内を済ませたら1度部屋にもどろう。

「あんた、もしかしてレイン君？」

懐かしい声が出て、声の方向を向くと風がいた。中学の時以来だが何も変わっていないようだ。

しかし何故風がここにいる？

「なんでって、私はここに転校してきたのよ」

じゃあ転校生というのは風のことだったのか。こうして顔を合わせるのは二年ぶりだったか。

「正確には1年半よ。久しぶりの日本だし早くみんなに会いたいわ」

キンケドウの居場所のなら知っているので後で教えてやるが、今は先に事務室に行つて手続きを優先しよう。

長旅で疲れただろうし、風の代わりにバックを持ってやることにした。

「あら気が利くじゃない。そういう男はモテルわよ」

生憎と既に嫁が居る。これ以上モテても困るだけだ。

「あんた結婚してたの!？」

何を言っているんだ。

俺はまだ高校生だから結婚なんて…

今、俺はなんて言つた？既に嫁がいる？結婚した経験はないぞ。俺の頭がおかしくなったのか？

…きつとボケつとしていたら変なことを口走っただけだ。考えるのはやめよう。

「…あんた大丈夫？」

大丈夫だ、ちよつと疲れていただけだ。それよりも移動しようか。俺はさっきのことを考えないように、足を動かして余裕をなくしていた。それでもしなければとても正気じゃいられない気がしたのだ。

☆

その日の夜、キンケドゥは嵐の部屋に泊まりに行っただけで自室には俺しかいなかった。

もう寝ようと思うほど、つい今日口走ったことを思い出してしまふ。何も考えないようにするほど逆に意識してしまふ。

気分が想像以上に優れていない。気分転換に少しだけ外を歩こう。何か変わるかもしれない。

☆

何故か夜遅くまで開いている食堂。この時間によくライルと会うことはあつたがとうぜん今はいない。

というか居るほうがおかしいのだ。こんな時間にうろついていれば警備員に注意されるのだから。

しかし俺の隣には布仏が座ってお菓子を食べている。一体どうしてこうなった？

「ん〜とね、お腹減っちゃったからかんちゃんにバレないようにここにきたらレーミンがいたんだ〜」

状況説明ありがとう。相変わらず甘い物好きなんだな。だが夜食にお菓子は太るからやめた方がいいぞ。

「む〜レーミンそれはいつちやいけないよ〜」

頬を膨らまして抗議してくる。かわいい。

ついぶくつと膨らんだ頬に指を指してしまう。ぷにぷにとした感

じが愛くるしい。

「やめてよ〜レーミン」

やりすぎてしまった。布仏に頭を下げてあやまる。

「そう言えばレーミンはどうしてここにいるの〜」

ちよつと眠れないから散歩してただけだ。少しも悩みなんてない、とは言いきれなかった。

布仏を前にして嘘をつくことが出来なかった。

「相談にのるよ〜」

話せばきつと布仏は全て受け止めて俺の悩みを解決してくれる、そんな甘い考えがよぎる。

話してもいいのだろうか。

「レーミンは私を頼つてもいいんだよ〜？」

布仏の目がこちらを真っ直ぐと見つめてくる。その瞳を目視していると吸い込まれてしまいそうになる。

俺は…

「お前ら何話してんだよ〜俺も仲間に入れてくれよ〜」

誰かも分からない男が俺の隣に座ってくる。こんな奴は知らない。他のクラスでも見たことはない。

誰なんだこいつは。

「あれ〜副会長もお菓子食べにきたの〜？」

「そうだよ（便乗）」

副会長？もしかして生徒会長が言いづらそうにしていたのはこの男のことか。

俺以外の転生者も生徒会にいたとは知らなかった。

「そう言えばレーミンには言ってなかったね〜。副会長のやじゅう先輩だよ〜」

「よろしくオナシヤス！」

一応、自己紹介を返す。

改めて見直すと、とても学生には見えず社会人のような顔つきだ。本当に同じ年なのか？

「やじゅう先輩は17歳でね〜レーミンの1つ歳上なんだ〜」

「学生です（半ギレ）」

何故彼は怒っているのだろう。

ともかく副会長が来たのでとても布仏に相談できそうにはない。今日はもう寮に戻ると伝えた。

「ねえレーミン、私の部屋にこない？」

「フア!？」

つい吹き出してしまう。

なにも口に含んでなくてよかったと心底思う。

しかしいきなり何を言い出すのだ。こんな時間に部屋に誘うとは、変なことを考えてしまうではないか。

「さっきの続きくまだ相談聞いてないよ？」

そういうことか。

聞いてもらえるのは嬉しいが隣にいる副会長がこちらを睨んでいるせいではないと答えづらい。

気持ちには有難いが今日はもう遅いし、また今度にしよう。その時に改めて相談するよ。

「約束だよ。ゆびきりげんまん、嘘ついたらハリのくます、ゆびきりた！」

布仏が俺の小指を勝手にとってゆびきりを交わす。まるで子供のようだが、微笑ましく暖かい気持ちになれた。

「じゃあ戻ろっか」

「あつ、おい待てい（江戸ツ子）お前なにしてんだあ!？」

急に大声を出されたので耳がキーンとする。布仏も同じように耳を塞いでいたが、ダボダボの袖で手を耳に当ててる姿がとても可愛かった。

「かわいいだなんて照れるよ」

声に出てしまっていた。こちらまで恥ずかしくなってしまう。

互いに目を合わせる事が出来ずにいる。

なんだこれは初恋をした中学生か？

「フア!?!ウーン……（心肺停止）」

俺と布仏のやり取りを見て副会長が倒れる。

どうしようかと布仏の方を見るとまだ頬が赤に染まっている。

「……部屋に戻ろっか」

もじもじしながら言う布仏の姿がマスコットみたいに可愛い。

「もうレーミン！」

また声に出してしまった。今度から口にガムテープを貼っておかないといけない。

馬鹿げた考えが浮かぶくらいには気分転換が出来た。これも布仏のおかげだろう。

本当にありがとうな。

「どういたしまして」

☆

その日は夢をみた。

大切な人と砂浜を歩いている夢だ。

その女性は急に駆け出し、俺も追いかけるように走る。まるでカップルのようなだった。

しかし俺はその人に追いつけず、最後にはとり残される。

それでもと走ろうとするほど足が砂浜に埋まっていき、体さえも飲み込まれてしまう。

声も出ないまま砂に包まれる。

体はどんどん沈んでゆき、完全に砂に埋まったあとも落下していくような感覚が襲ってくる。

このまま落ちきったらどうなってしまうのだろうか。

そんなことを考えているとき、地面に叩き付けられて目が覚める。ベッドから体が落ちたせいで起こされたようだ。ここまで寝相が

悪いのも随分と珍しかった。

時間もまだ起きるには早かったので二度寝することにした。

たまにはこんな日があってもいいだろう。

5話

「それじゃあ会議を始めるわよ。レーン君はメモお願いね」

生徒会長に言われて赤ペンを持ちプリントに書き込む準備をする。今は放課後、生徒会室に集まって今月のクラス代表戦について会議が行われている。

今日はあの副会長がいないみたいだ。何故かあの人は俺を睨んでいるから苦手なんだよな。

とりあえず言われたことを書き込む。

午前中の第一アリーナで一年生の試合、それが終わったら二年生の試合を半分行い昼休みを挟む。その後二年生の試合が終わり、三年生という順番だ。

「それと生徒会は生徒の誘導を行うわ。レーン君は北側通路、本音は1年生の観客席、私とうつほちゃんは司令室にいるから指示されたら従ってね」

更にメモに記入していく。思ったよりも仕事があるようだ。確かにこれはクラス代表はできないな。

「これで連絡は終わりよ。何か質問はあるかしら？」

特に問題もない。強いて言えばあの副会長は何をしているのか気になるが、もう一度会って変な目で見られるのも嫌だ。触らぬ神に祟りなしとよく言った。

来週にはクラス代表戦があり、それが終わるともう5月が終わってしまう。この学園に来てから時間が経つのがあつという間に感じる。

それだけ充実しているということかもしれないな。

「じゃあ今日は解散ね。次は試合の前日に集まって役割確認するから忘れないでね」

手をひらひらと振って生徒会長が生徒会室を出ていく。布仏先輩はまだ事務作業が終わってないようだが、俺に手伝えるようなものはなさそうだ。

布仏と目が合う、が顔を赤くして違う方向を向いてしまった。やはり昨日のことを怒っているのかもしれない。

昨日は変なことを言っただけで悪かったと謝る。出来れば許して欲しいのだが、布仏はこつちを見てくれない。

仕方ない、スイーツを奢ると約束した。

「本当に〜?」

やつと布仏がこちらを振り向いてくれる。

本当だとも。だから昨日のことは許して欲しい。

「別に怒ってないよ。でも昨日のは……」

「レーン君、本音といちゃつくな。何処か行つてちょうだい。目の前で見せびらかせないで」

布仏先輩から怒られる。別にいちゃついている気は無いのだが、邪魔になつているのは本当だ。

とりあえず布仏を連れて食堂に向かうことにした。

☆

あれから数日が経ち、いよいよクラス代表戦当日となった。

俺の仕事は北側通路が混まないように誘導するのだが、高校生がとくにはしゃぐ様子などなく混雑することもないまま入場が完了した。

空いてる観客席で見ても構わないと言われたので俺も席について試合を見ることにした。

一試合目は1組対2組の試合で、セイエイと確かホワイト・グ린トという男だったはずだ。

既に両者のISがアリーナに揃っている。

グ린トのISは白銀の装甲に包まれ、両手にはアサルトライフル、肩にはミサイルが積まれている。それだけではなく背中には仰々しいブースターまで取り付けられていた。

互いに睨みつけていると試合開始のブザーと共にどちらも加速して近寄る。速さでは僅かにグ린トの方が速い。

グ린トは回り込むように軌道をそらし、セイエイはそれを逃がさないようにグ린トを追いかける。

グ린トのライフルから銃弾が放たれ牽制されるが、流石にこの程

度の攻撃は『量子化』をつかうまでもなくセイエイはあっさりと避けている。

おそらくセイエイは相手が本気で攻撃してくるのを待っているのだろうがグリントもそうしてやるはずもなく、追いかけてつこうが続くばかりだ。

一体どちらが先に仕掛けるのか予想していたとき、生徒会長から連絡が入り至急司令室に来てくれと指示が出た。

試合はまだ途中だが生徒会として断ることも出来ず、一度観客席を離れて通路に出て集合場所へと向かう。

何があつたかは分からないがとにかく急いで走っていた時に急に爆発音が聞こえてくる。

試合に展開があつたのだろうか、とても気になるが今は司令室に向かうしかない。

ようやく辿り着きドアを開けようとするも一向に開く様子がない。生徒会長に連絡して内側から開けてもらおうとしたが何故か圏外になっっている。

ドアから一度離れて助走をつけてタックルをするもスンともしない。IS用のアリーナなのだから他の部分も強固に出来ているのだから当然なのだがそれでも繰り返した。

中では一体何が起きたんだ？ドアも開かず電話も圏外となつているとなると、電子系統が全部落ちたのかもしれない。しかし蛍光灯がまだついてるので停電ではなさそうだ。

もう一度ドアを叩こうとした瞬間、アリーナの方から爆発音が聞こえてくる。

さっきのよりもっと大きい爆発、ミサイルなんか比じゃないくらい大きい。まるでISのエネルギーを全部爆発させたかのような恐ろしい音がここまで響く。

ようやく目の前のドアが開き部屋に入れるようになる。中に駆け込んでアリーナの様子を見てみると、グリントでもセイエイでも無い謎のISがそこに倒れていた。そう、既に2人によって破壊されていた。

「無事だったのね、レーン君」

俺の隣に生徒会長が並ぶ。

あれは一体なんなのか、何が起きたのかを教えて欲しい。

「あなたを呼び出した直後に無人のISが入ってきたのよ。エネルギーギースールドを無理矢理破ってね」

無人のISだと？ISは有人でしか動かないはずだが。いやそれよりもエネルギーギースールドを破るほどの威力を持っているだなんて、まるで人殺しを目的に作られたISじゃないか。

「私たちも戦うとしたんだけどハッキングをくらってまともに動けなかったの。アリーナに残っている2人がなんとか無人機を倒してくれたのよ。でもその後無人機は自爆してISコアは消失、結局正体も掴めなかった」

さつき聞こえてきた爆発音は無人機の自爆だったのか。アリーナの土が無残に抉られていてグリントのISも損傷している。

しかしいきなり現れたISを倒すとは2人共流石だな。俺では敵いそうにない。

「レーン君、三年生を体育館に誘導して。私とうつほちゃんが一年生と二年生を担当するわ。全校集会を開くわよ」

はいと頷き、俺は走り出した。

☆

無人機が現れた後、クラス代表戦は中止となり全校集会が開かれた。

生徒及び教員に対して無人機の情報的一切外に出さないことを命じられた。もし破ったなら3年間はこの学園で監視されて生活することになる。プライバシーなんてものは一切ない。

学園側は無人機の情報について話すことはなく、セイエイとグリントが共同で戦闘の記録は全て消去され、生徒の間でも謎のままに終わった。

他国から宣戦布告やテロリストの秘密兵器などと噂はあったもの

の、所詮は噂に過ぎず時間が経つと消えていった。

生徒会である俺も後片付けとして無人機の撤去を行ったが、爆発した後ではなにも読み取れずただの歪んだ鉄塊にしか見えなかった。

こうして無人機襲撃事件は終結、情報が外部に漏れたということとなく無事に終了した。

俺もいつも日常へと戻り、副担任と補習を行う毎日を過ごしていた。学園の授業って難しすぎないか？

☆

担任からのありがたいお話が終わりようやくSHRが終わったかと思えば珍しく副担任が教卓に上がる。

「今日は皆さんに転校生を紹介したいと思います。シャルルさん、ラウラさん入ってきてください」

二ヶ月連続で転校生だなんて珍しい。ここまでくると何か仕掛けられているんじゃないかと疑う。

教室のドアを開けて2人の生徒が入ってくる。1人は金髪のショートで女の子のような顔つきだが制服は男性用のを着ている。もう1人は腰まで届きそうな銀髪をなびかせた女子だ。

「始めまして、フランスからやってきてシャルル・デュノアです。よく女みたいって言われますけど男なのでよろしくお願いします」

「……ラウラ・ボーディッツヒだ」

フランスから来たシャルルは見た目とは裏腹に男だ。男でありながらISを使えるということとはコイツも転生者の1人なのかもしれない。

ラウラと名乗った女子の左目には軍人が使うような眼帯がつけられている。キンケドウが着けていた眼帯もああだったと思いつく。

名前しか名乗らなかったボーディッツヒは何故か俺の後ろにいる織斑の席まで歩いてくる。

「…貴様が織斑だな」

「そうだけど何か？」

これは恐らくセシリアのときと同じくボーディツヒはカツアゲをするつもりだ。織斑に助け船を出してやろう。

「えっと、あやまれ？レーン何を言っているんだ？」

「…貴様、私の話を聞け」

「カツアゲ？…あ」

「おい貴様、いい加減にしないと」

「すいませんでしたあ！金なら出すんで許して下さい！」

完全に決まった。ジャンピング土下座が綺麗に入り、ボーディツヒは唾然としている。

セシリアに絡まれてから織斑の土下座の練習に成果がようやくできた。今まで（の）（やってきた）地道な（土下座の）練習は決して無駄ではなかったようだ。

「貴様ア！ふざけてい——」

「ボーディツヒ、後で職員室に來い」

「教官!?私は何も」

「職員室に來いと言ったんだ。三度も言わせるつもりか」

「……はい」

担任という正義がボーディツヒという悪を倒し今日も平和は守られたようだ。

「あはは、随分と賑やかそうだね…」

デュノアが萎縮していた。それも当然、転校初日でヤンキーみたいなのに絡まれている光景を見たら驚くに決まっている。

「何で私が……」

ボーディツヒは涙目になって俯いていた。可哀想だが擁護できるものではないし、担任から説教をもらって考えを改めてほしい。

「それではSHRを終える。次はグラウンドで実習だ、遅れるなよ」

「「はい！」」

「では解散！」

少し長くなつたがSHRも終わり、みんな更衣室へと急いでいる。次の授業まではほとんど時間が残っていないし、着替える時間も含め

たら遅刻しかねない。

「シャルルだっけ？一緒に行くこうぜ！」

「う、うん。えっと」

「俺は織斑一夏、前にいるのがレーン・エイムで、銀髪なのが刹那・F・セイエイだ。よろしくな」

「わかったよ、よろしくね！」

「おっと、急がないとやばいな。レーンも行こうぜ」

ああ、そうしよう。

俺も席を立ち上がって廊下を走り出した。

☆

今日の授業は1組と2組の合同実習だ。グラウンドには既に全員揃っているみたいだ。ギルガメッシュと目が合ったので手を振っておく。

他にもライルがセシリアと話をしていたが、事情を知ってからはその光景は幸せなカップルではなく空虚なものにしか見えない。

他にも転生者がいるようだが誰だかまでは把握出来ていない。というか思っていたよりも多すぎる、男だけで9人もいるし専用機持ちなら凰も加わって10人だ。1組の専用機持ちは俺たちに今日転校してきたデュノアとボーディツヒの2人を合わせても7人しかない。

担任が少し遅れてきてようやく実習が始まる。今回も専用機持ちは指導側に回るようになったが、合同ということもあり専用機持ち同士組んで指導するグループ実習に変更された。

「君がレーン君？俺、五代雄輔っていいいます！今日はよろしくお願いします！」

俺のペアは2組の五代という男になった。なかなか明るい顔をしながらサムズアップをしている。とりあえずいい人そうだな。

俺も自己紹介を返してから実習を始める。今日はISの移動訓練なのだが、思うようにいかない。前回見学で初めてISに乗る生徒の

ほとんどは歩く前に倒れてしまう。

「ISに乗っていると少し目線が高くなるから平均台の上に乗っているイメージを持つんだ。ちよつとやつてごらん」

五代のアドバイスを受けた人はみんな動きが良くなっている。イメージさえあればそれを認識するインターフェースがあるISならではだった。

グループの指導は五代に任せよう。俺に教える才能はないし、出番が来るまで待つことにするか。

「五代君教えるの凄いうまいね!」

「あはは、照れるなく」

「ここの班みんな上手くいってるよ!」

「これも五代くんのお陰だね!」

「いや、みんな上手だからだよ。俺は教えたただだよ」

グループがワイワイと騒いでいるが俺はそこに加われない。ま、この時間くらい1人でゆっくりしてもいいだろう。

「なんだ、お前もサボりか?」

キンケドウがこつちに来ていた。確か織斑と組んでいたはずだが、コイツも俺と同じみたいだ。

こういう授業はどうも性に合わない。きつと前世でも俺は苦労していたのかもしれない。

「まったく、ああいうのは織斑がやればいいんだよ。女子もその方が納得するからな。お前も誰かに任せてるんだろ?」

そのとおりである。長い付き合いだけあつてよく俺のことを理解してくれているよ。

そう言えばキンケドウに礼をすると行ってから何もしていなかった。今更になって悪いが何か希望はないだろうか?俺に出来ることなら何でもするが。

「な、何でもだと。……な、なら今度の日曜に買い物に行かないか?」

買い物か、最近はずっと学園の中に居たしたまには外に出るのもないな。ならギルガメッシュも呼んで久しぶりに3人で遊ぶか?

「…あいつは」

「悪いが俺は遠慮しておくぞ。ちと用事があるのでな」

ギルガメツシユもいつの間にかこちらに来ていたようだ。三人で顔を合わせるといいうのも久しぶりだというのに遊べないのは残念だ。

というかギルガメツシユまでサボリとは俺たちとはとんだ不良集団になっっているな。

「ふん、あの程度のことを俺がやる必要などない。勝手にやらせておいた」

随分と放置主義な指導だな。本当にそれでいいのか？

「くどい、二度も言わせるなよ」

「コイツももう一人の方に任せたんだろ。俺達はゆっくり休んでいこうぜ」

まあ俺も2人のことを言えた訳では無い。どうせ五代がやってくれるはずだ、授業の終わりまでこうしていよう。

☆

ある日の夜のこと、珍しくギルガメツシユから話があると呼び出されて俺は特別教室に来ていた。

「最初に謝っておく、悪いな」

何を言っている理解できなかった。ギルガメツシユは俺を真っ暗な教室の中に押し出し、自分だけ外に残る。いきなり両手を掴まれて引っ張られて椅子に座らせられる。

一体何だこれは、頭が追いつかないぞ。

「コイツが噂のレーン・エイムだな」

「はい、間違えありません」

何処からか声がするがよく見ることができない。というかこの声は確か……そうエミヤだったはず。何故あいつがここに？

「では、全員揃ったようだし『第4回転生者会議』を始めようではないか」

転生者会議……ここに居るのは転生者だけなのか。

「では前回から議題が上がっていた『レーン・エイムは何党なのか？

“を話し合おう。さっそくだがレーン君、君は一体何党なのか答えて欲しい”

何党？なんだそれは、政党って意味なら支持している党は今はないぞ。

「聞き方が悪かったみたいだね。ではどのヒロインが好きかい？」

ヒロインって言われても何かさっぱり分からない。ゲームとかドラマのヒロインのことなのか？

「…あー刹那君、パネルを用意して」

「了解した」

俺の目の前にホワイトボードを引き連れた刹那が現れる。何をやっているんだコイツは。

そのボードには写真が貼ってあり、上から篠ノ之、凰、オルコット、デュノア、ボーディツヒ、簪、生徒会長の七人の正面顔が載っている。

「この中で一番好きな女の子は誰だい？」

…は？何だその中学生が修学旅行で好きな女子を無理矢理喋らせるような質問は。まったく馬鹿馬鹿しい。

質問を無視し立ち上がって帰ろうとするが、いつの間にか俺の手と椅子が手錠で結ばれていて動くことが出来ない。

「ちなみに答えてくれるまで教室から出すつもりはないよ」

舌打ちをうつか溜息を吐くか心の中で迷ったが、さっさと答えて帰ることを優先した。

その中に好きな奴はいない。せいぜい友達として仲がいくらいだ。

「ふーむ、そうだったか」

「間違いないですよ！コイツは絶対のほほん党ですって！」

「はつきりわかんかね」

「刹那君、のほほんちゃんの画像も追加して」

ホワイトボードの裏から写真が取り出し貼り付けられる。その写真には布仏の正面顔が写っている。

「レーン君、君の好きな女子はのほほんちゃんかい？」

NOだ、布仏も友達であって好意があるわけじゃない。

「は？（威圧）」

「嘘つくんじやねえ！お前この前またイチャついてた癖によお！」

見られていたのか。なんとも恥ずかしい出来事だから忘れて欲しかったのだが。

「この野郎!!」

「まあまあ、エミヤ君落ち着いて。えっとレーン君、君は本当に好きな女子はいないのかい？それともこっちの同性愛の方が好きなのかい？」

女が好きじゃないくらいで男色家と見られるのは心外だな。別に好きな女子がいなくらい変なことではないだろう。まだ六月で知っていない生徒だっているのだから。

「もしかして君は『原作』を知らないのかい？」

「原作」？確かギルガメッシュが1度そんなことを言っていた気がするが、俺は詳しくは知らないな。

「ははは、まさか原作知識無しとは。これは済まない。刹那君電気をつけてくれ」

「了解」

刹那の握っていたスイッチが押され、教室が眩しくなる。辺りを見回すと男子生徒がズラリと並んでいる。

「改めて非礼を詫びよう。俺の名前は東方不敗、このIS学園の理事長を勤めているものだ」

理事長が転生者だと？そんなことってあるのか。

想像以上の驚きに俺の頭は回らなくなっていた。

「この会議は転生者が集まってこれから起きる出来事、ヒロインとのイベントについて語っていく会議なのだよ。今日の前にいる女子達はこのにいる転生者が狙っているヒロインでね、君が誰を狙っているのか把握しなかったのだよ」

思春期の中学生かよ、と心の中で突っ込む。

別に狙っているとかは置いといて誰とだって仲良くしていきたいというのはある。

「まさかのハーレムを希望とはな」

「希望があつていいんじゃないか？無関心な奴よりマシさ」

左側にいるグラサンをつけた奴と凄く独特な髪型をした男が発言したようだ。

別にハーレムなど考えてもいない。何故普通に友達として仲良くなるうと考えられないのか。

「ま、我々転生者は世界人口に比べて非常に少ないのだから助け合つて生きていこうということだよ」

できれば最初からそう言つて欲しかった。

助け合いということなら手伝わせてもらおう。小さい頃、ギルガメッシュに助けられたように俺も誰かの助けになりたいのだから。

「では決まりだね、レーン君を転生者議会の一員として認めよう。異議あるものは唱えてくれたまえ」

「……………」

「全員賛成みたいだね。これからよろしく頼むよ、レーン・エイム君」

ああ、こちらこそよろしく頼む。

俺は東方不敗に差し出された手をとつて握手を返した。

6話

六月、まだ梅雨の時期に入らない上旬頃に俺たちは街に出かけていた。あと一週間もすれば雨が続く日々になるであろうと思い、今日にしたのだ。

しかしこうして街を歩くのはいつぶりだろうか。小学生の頃から会社の中で過ごし必要なものは全て用意されていた。無論娯楽もあつたので尚更外に出る必要がなかった。友達はあるの2人がいるだけで退屈はしなかったし恋人を求めたこともなかった。

ある意味では俺はあの二人に依存していたのかもしれない。

隣を歩くキンケドゥに目を移すといつも彼とは思えないくらいの機嫌がいいように見える。キンケドゥの手に握られている限定のクレープのおかげだ。店主が俺達をカップルと勘違いして偶然手に入ったものだが、その味は絶品だったのでカップルであること訂正しなくて良かったと言える。美味しそうに食べるキンケドゥの顔を見ているこっちまでお腹が一杯になってきた。自分のクレープを譲ってやろうかと提案するとキンケドゥの顔が真っ赤になる。

「……もらってやるからはやくよこせ」

クレープの上部分を手で切り取り残ったクリームが詰まった部分を渡す。当然だが俺が口をつけた部分を渡すわけにもいかないのだからこうしている。

「……」

何故か不意に顔をされてしまった。そんな顔をされてももうくれてやるクレープは残っていないのだ。まだ食べたいというならやめておけよ、昼飯を食べられなくなるからな。

「それくらいわかってるよ。……フン！」

そっぽを向かれてしまった。一体何が悪かったのか俺にはさっぱりだった。

昼飯を適当なレストランで済ませてまた街を適当にぶらつき始め

る。気まぐれにショッピングモールに入り服を覗いてみる。滅多に私服を買わないキンケドウに何かプレゼントしてやろうと似合いそうな服を見繕う。出来るだけボーイッシュでヒラヒラしていない動きやすい服・・・真っ先に浮かんだのは中学時代に着ていたジャージだが、流石に怒られそうなのでやめておく。そこそ良い服を見つけたのでコツソリと購入して店員に包んでもらい、後でサプライズとして渡そう。

どこに行っていたかと聞いてくるキンケドウにトイレだと言って誤魔化し買い物続ける。

買った服は気に入ってくれるだろうか。

☆

カタカタとパソコンで作業をする生徒会長を横目に手元のプリントをまとめる作業をこなす。時は放課後、俺は生徒会室で次の行事「タッグマッチトーナメント」について全校生徒に向けての告知準備をしている。

明後日には告知し、来週には開催されるため俺達生徒会は大急ぎでポスター制作と受付用紙を作成しなければならなかった。もつとも生徒会長が普段から真面目に活動していればここまで忙しくはならなかったのだが普段から校内の警備という名目で妹をストーキングもとい護衛していたからである。

会長を責めたかったが役員でありながら気づかなかった俺も同罪であり、何も言わずに作業することにした。

3時間後、ようやく必要な用紙も揃い、後は各教室に配布して廊下にポスターを貼れば告知は完了だ。

「こんな時間まで付き合ってもらってごめんねレーン君」
今更である。

しかし生徒会にでも入ってなければこういった作業を経験せずには有らだらしていただろう。それなら生徒会にいたほうが自分には有

意義である。

むしろ生徒会には感謝しているのだから会長が頭を下げる必要はない。

それよりも早く夕食にしたいのでさっさと食堂に行きたい。

「ならお姉さんに任せなさい。今日はたくさん頑張ってもらったから奢ってあげるわ！」

流石に女性に奢られるのはと思ったが、ここまで頑張ったのだしご褒美として受けとろう。

その後、食堂で財布を持ってくるのを忘れた生徒会長を見て結局俺が2人分払った。

☆

☒ タッグマッチトーナメント開催の知らせ☒と大きく貼られたポスターが廊下に並ぶ。開催日は今日の10時からである。現在の時刻は11時を過ぎ、本来ならば二試合目が始まるはずだった。

しかし一試合目の最中にISの暴走が起こりアリーナのシールドバリアに破損、観客席にまで攻撃が届いてしまった。不幸中の幸いか怪我人は暴走を起こしたISのパイロットのみで、避難した生徒はみな無事だった。

生徒会はその後始末を任されており、俺はアリーナ周りの廊下に貼られたポスターを回収することだった。生徒会長や教職員達はアリーナの復旧作業および暴走したISの回収である。

どうにも暴走した原因がISのプログラムにあるらしく一般生徒には秘匿しなければならなかったため俺もアリーナの内側に入ることは出来ない。

当然だが今回のタッグマッチトーナメントは中止、アリーナの復旧完了までは使用不可である。少なくとも1週間は使えないだろう。

その後、生徒会長の命令で暴走したISのパイロットの様子を見に行こうと保健室に向かったが結構な人集りが出来ていて苦労した。

その時にパイロットがラウラ・ボーデヴィツヒだとようやく知っ

た。

コイツも苦労しているのだな…と少しだけ同情した。